

地

二四九



木曾路名所圖會

三

915.5

327

Vol. 4

木曾路名所圖會卷之三

○落合

霧原山

第本

皂鵬巖

丸山城跡

岐阻路山中

光徳寺

兜巖

○三富野

羅天橋

牛頭天王

飯宮

目録

落合橋

御坂古蹟

兼好法師跡

下坂川

吉獲路

雄雄瀑布

妻籠古城

風越山

團原先生碑

伊勢山

住吉祠

熊野権現

十曲濱

菌原

源倉街道

諏訪祠

木曾川

大妻籠

鯉巖

吉本名岳

牧澤橋

赤坂蘇嶽

白山権現

等覺寺

夏信園場

伏屋邑

馬籠

永昌寺

○妻籠

牛頭天王

烏帽子巖

捨樹澤

横川戸橋

揚麓山

若宮祠

観音堂



岩戸觀音

○野尻

鹿島祠

妙覺寺

長野

貴布祢祠

阿滿橋

淨勝寺

小野滝

歎類皮店

鹿嶋祠

本曾橋同跡

本曾川

興善寺

名産和合酒

飯盛山

白山権現

野尻家

今昔草平城

出雲祠

雲出觀音

本曾堂

御先河橋

觀音堂

神明

御嶽川

御室

三富聖郎

本曾大河

住吉祠

本戶致春家

木曾殿館

天長院

須原

陳川寺

阿彌陀堂

三飯廻前用居

御嶽

福島

福島

木曾古道

牛頭天王

諏方祠

聖瓦城山

弓矢八幡

辨財天森

伊奈川橋

床邊祠

寢覺床

氣比祠

上松

御嶽鳥居

福徳園隘

長福寺

義康古城

名産

権守兼遠家

野坪池

宮腰

本曾義仲城

山吹山

義仲手洗水

萩原宅

名刺家五掃

禎明神祠

長泉寺

名造諸器

櫻澤橋

名家譜

赤龜

作原

研犬谷

正八幡宮

樋に次郎兼光館

荻曾川

藪原

五反田橋

鳥居嶺

綱懸嶺

赤良并義高家

諏方祠

藝川

本曾義昌家譜

名刺表

水精山

新地澤

南宮祠

今井即兼平城

往還橋

熊野權現

巢鷹官舎

義仲硯水

赤良并橋

千村重昭宅

平澤

構本澤

明星巖

烽火嶺

德音寺

巴御茶茅蹟

德音寺橋

極樂寺

土産

赤良井

大寶寺

土産

藝川

諏方祠

藝川

親善寺

千村俊政家

五月日橋

黒川温泉

箕地山

西野

氷満園道

本芳殿墓

幸山

吾光寺乃

塩尻

鷲善寺

荻曾

衣更右衛門

山神祠

烽火臺

黒澤

土産

兼遠墓

幸山親音

桔梗原

塩尻嶺

押巻橋

諸獸

赤川

駕疲嶺

小石墳

御嶽権現

崩城古城

洗馬

大綱清水

浅間祠

熱河四郎宅

土産

秀洞澤

燒棚山

地渡澤

御嶽山

岩戸権現

三浦山

義仲馬洗水

阿禮神社

大岩

本曾路名新園會卷之三目錄終

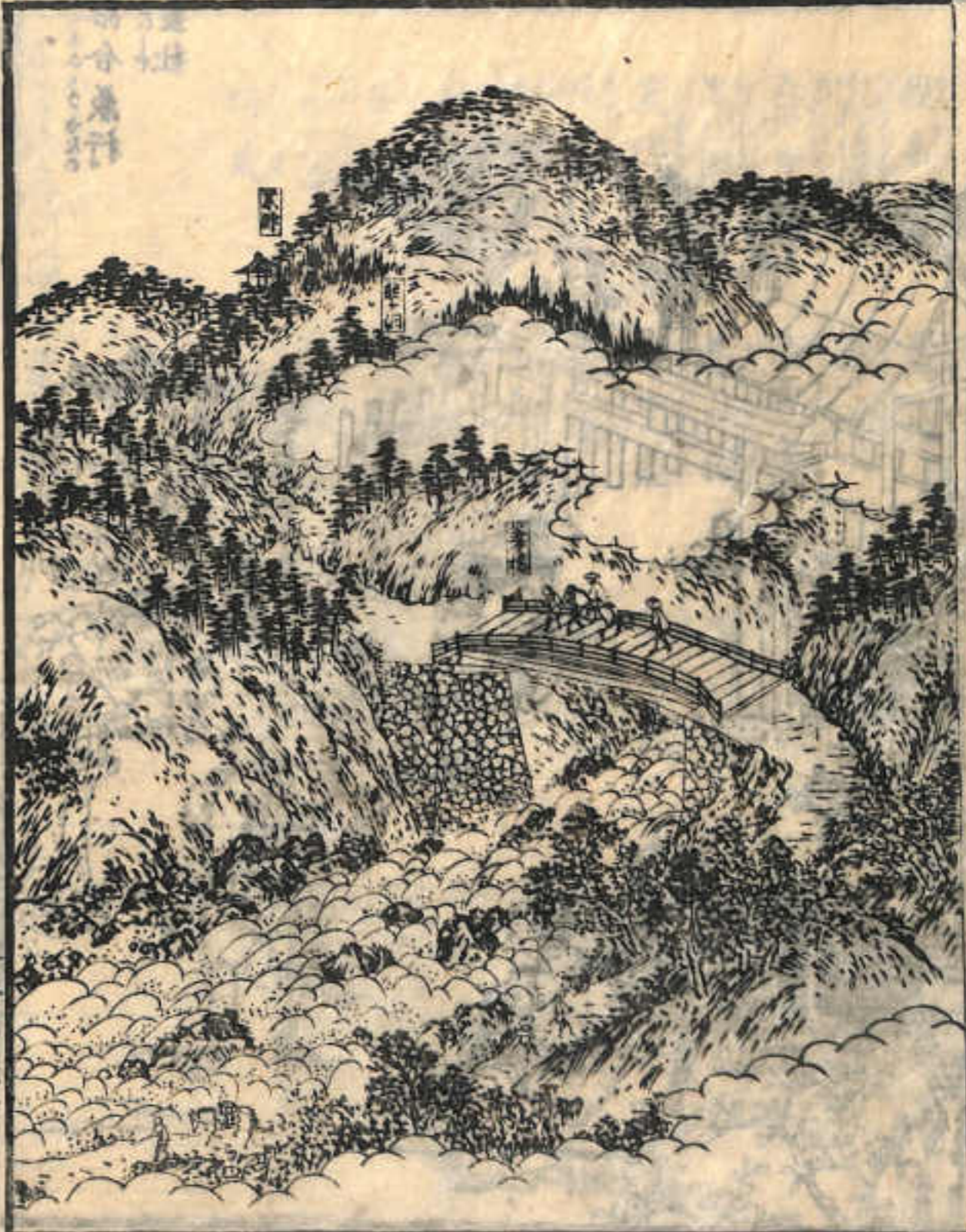
本卷前二

落合兼行
靈社



落合橋
 十曲渡
 美信二州
 國見

木曾藩



木曾藩

木曾路名所圖會卷之三



馬籠まで一里五町は宿と若竹炮を製して涉る者あり
いりへ落合五郎兼能とる者居候の地あり野のあま
方小杉の大樹多くある林あり其中小落合の所が靈と云ふ
洞ありは宿賦

落合橋

橋の入口小あり谷ヶ瀬ともいふ双方より梁瓦出り

十曲嶺

嶺の馬籠の間にあり野人の杉石塔あり十曲といふ

美濃信濃國境

小あり

霧原山

霧原より東七二里許あり山中一里餘平地あり地

千代松を耕し一町の産を得たり其中小松七八
疋あり其傍に宋銭にして其平野野に五瀬及以河元瀬
定大槻政和

御坂山古道

本州大井野の千代松より本郷まで大室二年英使
本郷路をゆくは御坂より圓形と絶て伊奈郡小室

大室二年

萬葉

知波夜布留賀美乃美佐賀爾怒佐麻都里

伊波員伊能知波意毛知我多米

主帳埴科郡神人部子墨男

後拾遺

志る雲のえより見ゆありのふれき根也津坂かろ

能國法外

夫本

信濃川向葦の原を登りて本郷の津坂の所あり

藤之内宮

續群

志る此なる本郷の津坂を小篠原を引籠もかくや藤原

藤中御妻

新千

台風本雲を舟のわれ信濃路やをせ津坂夕夕を

千惠法外

古事記

日本武尊條曰越科野國言向科野之坂神而還來尾張

圖云

景行紀

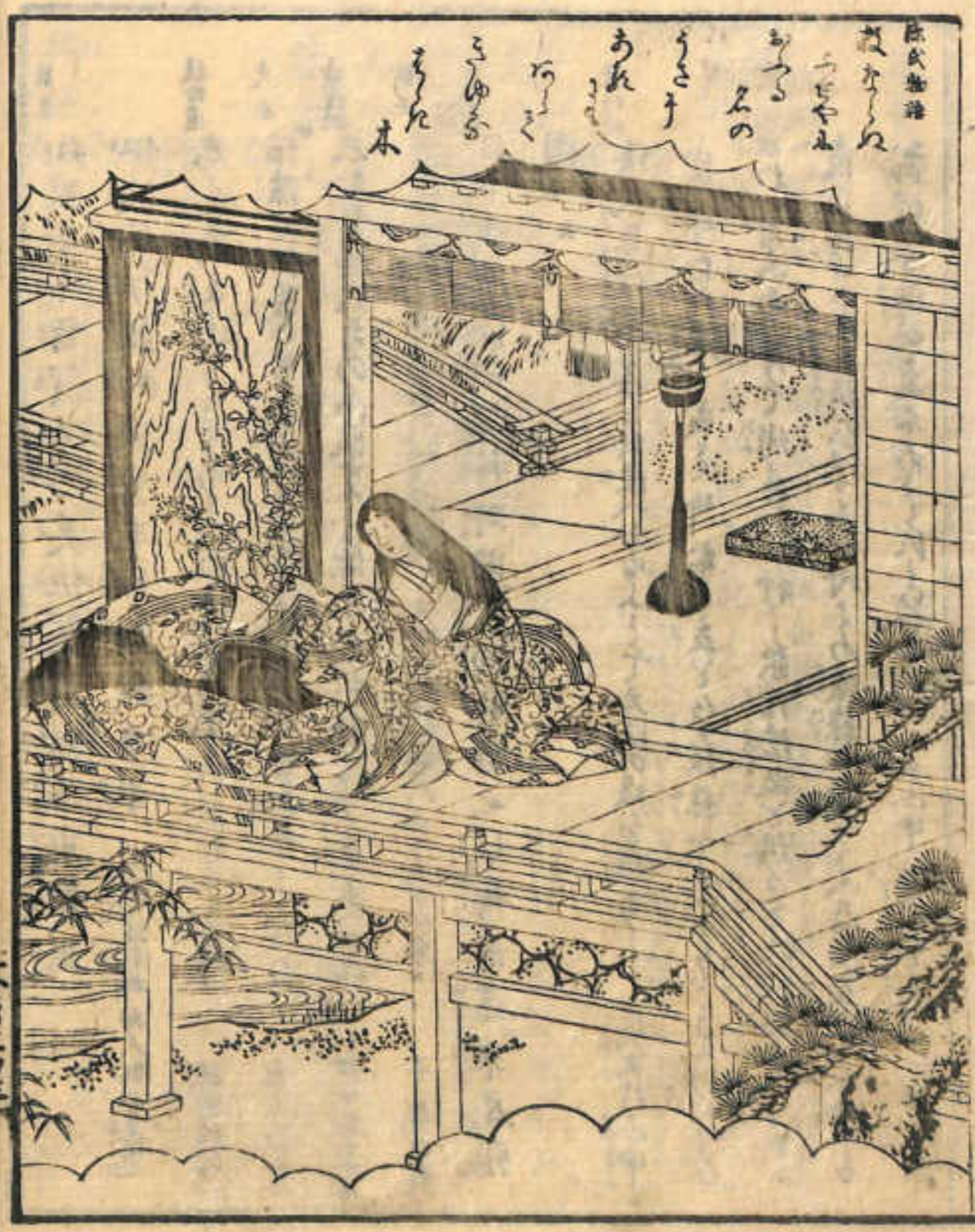
倭武尊信濃より美濃へ出るふして大坂の坂を越るふ

山の神白兒麻と成る時前よまをりてそのおほく神

氣よ河をく煙ひるふは時より後森を齋く人なる

牛馬小舎を

おのほく神の氣本ありて又曰る山中に道を共ひて



全書

白狗導を執事ありて吳法小出のふと云

今いひて信濃守藤原陳忠と云ふ人ありき

元方の二男なり云五任國畢てなれ上りたる清敏と頼朝同馬の馬

本を後足環して踏折る守達さぬ本馬よ来かぐ藤原の藤原

な小着を長く人のまゝなる中に守の素よりなる馬と頼朝の藤原

本を後足環して踏折る守達さぬ本馬よ来かぐ藤原の藤原

な小着を長く人のまゝなる中に守の素よりなる馬と頼朝の藤原

本を後足環して踏折る守達さぬ本馬よ来かぐ藤原の藤原

な小着を長く人のまゝなる中に守の素よりなる馬と頼朝の藤原

本を後足環して踏折る守達さぬ本馬よ来かぐ藤原の藤原

な小着を長く人のまゝなる中に守の素よりなる馬と頼朝の藤原

本を後足環して踏折る守達さぬ本馬よ来かぐ藤原の藤原

菌原

今この御厨小のありは英法諸より古道ありて

全書

これより一説は八重田のれく小ありて十の系

かりと今もいふ所のこゝせよなりと云

そはもや伏屋本生るる本の有といふと云

ゆゑてをあれもいふ本本ののせけり云

伏屋里 菌原の中にある同系をいふと云

其志は信じて小家のありて其の足先より

と引て從て至るその系は

古昔有家武人之倭文幡乃帯解替而廬屋立

妻問為家武勝牡鹿乃云

又廬八燦ぬせをのすれい存或は田ふせあり

云々て地本よりふせられぬも云々

第本 菌原の中にある同系の意より見渡せば

はあつりい坂地たうけりて

或人の目掛あり一とせ受領小く入く山小翁と云く幸有く小
 ひつもの目掛あり若しり殺し出く上る石橋よと云く幸有く
 又他村に於て殺し出く上る石橋よと云く幸有く
 たて、お方の目を思われおことと云く幸有く
 兼好法師菴 住れし今今勢原の中に後頼を云と林も付あり兼好を
 後頼也 昔使通るる山中の者能也
 通して今又能て後頼を云と林も付あり兼好を
 鎌倉街道 今勢原を往く勢原山より沖坂小坂の所々長馬お
 の妻証ありむり大寶年中開く所の古乃あり久く
 て後通つに中右遠山氏と云く者あり遠山氏の在を領は
 附鎌倉將軍の代られをは通より鎌倉へ通れ又甲州武田氏乃
 を往く御を云と
 後頼也 昔使通るる山中の者能也
 御列格御目入るなり

馬籠

妻後身で二里駅中南北三町

其好民居山中に散在に

皂鵬巖

故の馬山より小あり其好皂鵬の若小集るる也
 故小名と云信矣二州を隔たり

下阪川

下流湯船渡り小川なり

諏訪祠

熊野権現祠にあり

永昌寺

徳正長福寺に屬す

丸山城趾

取の馬山より小あり丸山七折に又取の自山と云くあり
 故小名と云信矣二州を隔たり

破蘚路

蘚路の山、津路、等、在、多し
 これその一なり

十載

れそ修り本者れけら丸本橋をりつ後小蘚及るれ

勅勅

本賊くれその所と見ぬ袖ぬとてみるぬ處も早と云

持送

中く小いもるをて後頼を云と林も付あり兼好を

持送

生ひきう舌の指れもて早くわぬ花よむ本考れけし

持送

分ては本者の構れなく小形を急ぬれ筆を云と云

持送

中云もると下にまふけしけのけうふさた本者の中云ら

持送

よも本者考の構れの中云云云と云と云月の中云ら

持送

さむ月のの中云らる山人のいてはるあはれ考のけし

本曹川

街乃の左小橋々大川中石

見せ

見せと云い久信法師の本考考の若も思ひの信と云らと

行次卿

願阿

左大馬

保頼實

法系法師

法古時院

宮内卿

寂蓮法師

空仁法師

法顯光

馬
山
景
色
詩
句



馬
山
景
色
詩
句
杖
道

後
開
胡
依
秦
丁
力
杖
道
料
通
騎
全
青
峯
委
蛇
絕
壁
峻
霜
樹
你
懸
冠
注
霜
天
嶺
角
不
掃
分
軍
少
驥
足
致
馳
隔
澤
年
荳
老
何
因
尚
日
李
采
菴
一
曲
隔
風
煙

霍山如惟龍



馬
山
景
色
詩
句

馬籠
馬籠
馬籠



馬籠
馬籠
馬籠

後開胡依秦丁力
棧道斜通騎令奔
峯委宛然隱峻竊
樹你懸懸泣痛天
勢眉不掃分軍夕
曠足致耽臨澤幸
楚老何因當日李
未種一由隔風煙

霍山如作龍



馬籠
馬籠
馬籠

信濃妻籠

三留野までまき里半駅中南小三河相對して蒼々たり
 其峰と山間小民居多し木為路と安曇郡たり物々作法
 々々園居て階坂多むれはつし一と科野と書はは國東の上野
 南八甲斐遠の三河小峯越後越中飛彈西と英波之凡八ヶ國
 本為深山中山谷中せむさくは田畑まはりて村里少し木茂豆豊
 寒甚し秋刈て裁まとも枯り倦園本て竹を用ひて
 用ひて中橋の籠本は橋本は用ひて葉と倦園より
 熱し山中木の梅多しと本も桃紅梅あり三河末頃
 小夜用く又は園居は松とて冬ハ葉とくを落る夏本
 松ありられを葉松とる
 雌雄瀑布 駅の南端あり雄とたふあり
 大妻籠 駅の南端あり
 牛頭天王 駅中にあり一村生上神と凡其外 神明祠
 頼宮祠八王子祠俱本村民多し

鯉岩



善哉古城

馭の東にあり城址現存天正十年本曾義昌が移を築いて

山村良勝攻めてこふ所じむ同十二年秀吉公本曾義昌を命じて

伊予路を禦し義昌兵良勝小増して善哉味小増の時小休

郡主菅沼小太郎諱新保科を兵を合本曾と就人し後以名小蘭の

砦を拔く善哉味と攻ふ良勝士率其命して鳥銃を放らこれを防く

伊予軍登る夏を待て退ひく遠巻りく且水道以割城中水あて

白木をよめく馬込はく款をえんく城中に水汲山より城壁して拔座

かえりて軍と退けく伊予は小増が良勝伏兵設けくこと討川

士卒死亡せる者多し若治大子敷走らせ良勝の功状美し

鯉巖

善哉の山より名あり

烏帽子巖

形似て烏帽子の形あり

兜巖

右小備ふれり

風越山

山名あり

本曾二ノ八

千載

詞花

風あけぬゆりくえんわの時きゆりやほまの屋小増と系

信補

丈本

風越の雲はく入めてく時をきくふりこれ抱きありはれ

若菜家純

詞六

子向ももむきひくゆり風越のまき聖の尾を種ふ聖小忠

源頭仲

十五首

さくをむとらの善哉よはにらまふ小増とく風あけ此峯

公徳

古本曾嶺

山名あり

松樹澤

山名あり

其の山を推して其の山を推して其の山を推し

其の山の射殺の遺跡ありん死

三留野

山名あり

統中三留野より聖屍をその間におりて考を通りけ同左を教十回



川をせせ
 本番の
 秋
 長茄子
 元全



三富聖の
 聖虎
 物々
 杖通
 多
 雲も
 下に
 ひろ
 け
 本番の
 山
 保徳具

かつは街道は純を神に右も左も山より屏風山まうためうして
 其中より奈大蔵はくわく路を遮ふ此る小橋をまうしてはも川の
 けうけうの橋もあつた祖道の絶ゆる所よけけたる橋あり徳園ふわ
 なるたふうけし綿あう山の尾崎孤島うく若口へ入る先の山中
 尾崎孤島なる所あり其谷道も横つうて溪川の流る本若川小落合
 所多しこれわうふ橋されあやうれ幸甚しけ間小中橋とらう所育
 其向ひ小坂友とらう所もあう其あうり溪川一流まうて妻方の間
 に大若あうり奈系方あり

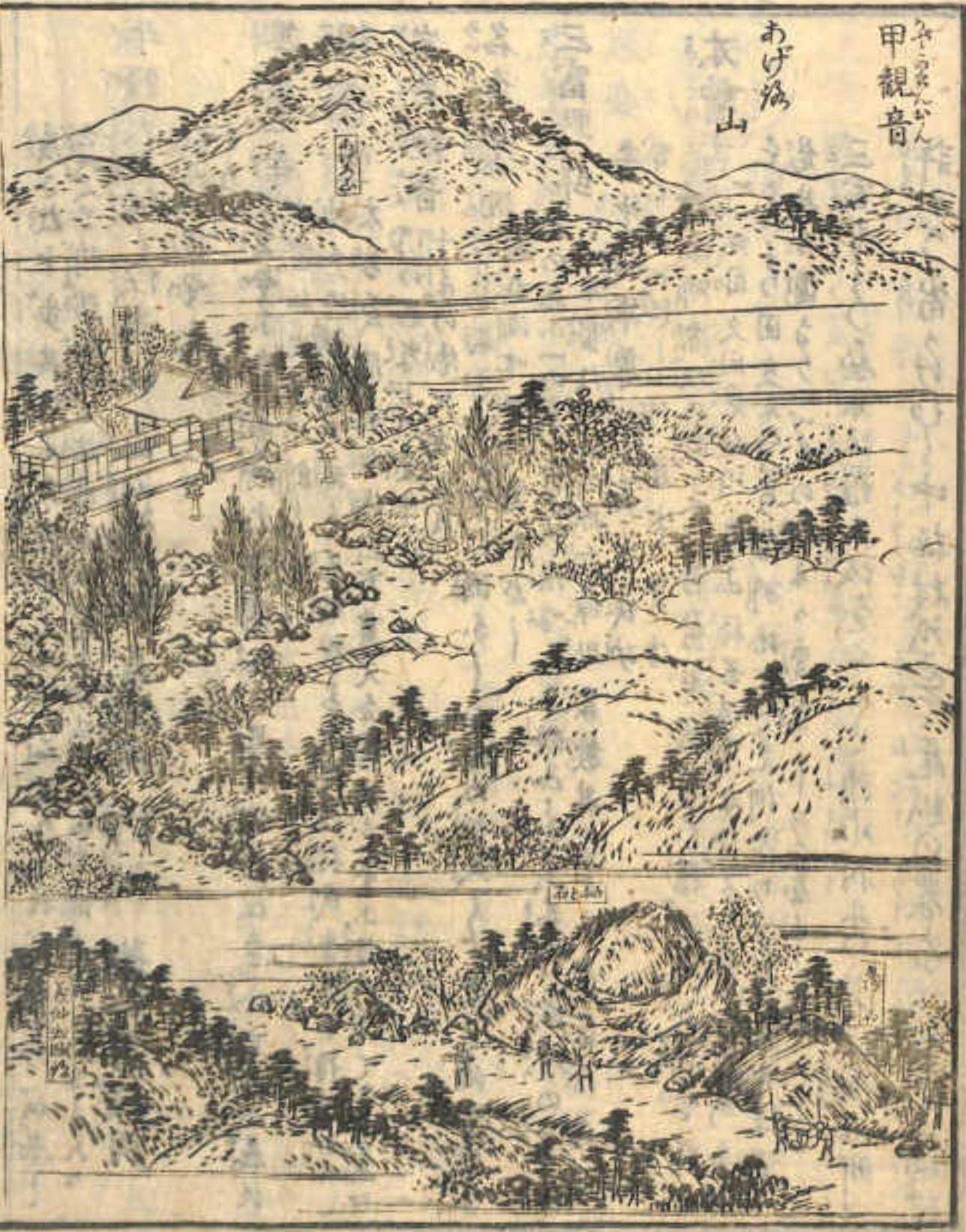
園原生の碑 神戸の東にあり天照三年を刻す

牧 牧澤橋 横川戸橋 羅天橋 いづれも橋あり

伊勢山 歌の西小坂あり河を隔りし里説之天正十年

奈岐蘓嶽 駅の東にあり又一名比叡山小入と本と成家

揚籠山 神戸の西ありそ即奈岐蘓嶽と成家



甲観音

あげ山

石山

廣さ約十歩其内山方式三丈の平地ありこれ其山境の石座と
云傳人て辨湯山姥の謡曲ゆ声をあけ流の中をせ淵山と云れり人
牛頭天王祠 住吉祠 白山権現祠 若宮祠 劍祠 慈野権現祠
俱小三家聖小

等覺寺 三富野小あり曹洞宗時魁山と号し徳州松本全久院小属し
妙雲和尚を所創し

觀音堂 神戶の觀音と稱し馬頭觀音安置し村民香火を捧ぐむし
本寺義昌永樂三百年貢文を奉附す今小遺状有て是と云ひ

岩戸觀音 千石の傍又安んじ
名産和合酒 本寺の岩戸に瀝るし和合の聖人より是く酒を造る

三富野邸 駒のあふ一の阜山あり信守人て城山と云ふ本寺義仲の子孫
中將軍尊氏小属し武功

本曾古道 徳州赤坂の駒より各勢聖成歴々積淵小山牧野上
相国久田見経川高山福居坂利小つるこれ信守小属

是共古道ありいづ道の代より交易一りるあり人
三富野より屋小坂羅天坂をこえく清水村小つるは同此所

許あり皆うけひし中極村坂をて尾越の農家に即り十二極村

信野尻

あり駒ヶ嶽鮮月見也内は時雲城峯に載きて風色斜あけくま
坂をこえく芝山下在家より聖尻の駒みいづる

須原までを里二十町は駒いづる一は野路里を書し駒中
東西五町餘相對して巷沢を其谷山間小散在し

飯盛山 駒のあふあり河を隔し
飯盛を盛るる

本若大河 三富野の東よりろろ坂をく上松小つる水流奔
騰して其聲雷霆の如く大雨の時水漲りて畏るべし

牛頭天王 鹿島祠 白山権現祠 住吉祠 諏訪祠 俱小村氏

妙覺寺 駒中あり味飯宗法雲と号し

野路里右馬助家益家 本寺長とあり文禄元年豊太閤檢地の時石河備
本寺光吉本若野の命と賜ふ

本戸彦左湯門致春 富小笠原の族小あり國東本戸小ありて氏とん
恒に其子孫歴代里層とあり家小吉甲曹乃也

太刀一柄あり長廿三寸許柄老く奇他あり

野路里館あり古甲野の標あり今城山と云ふあり古徳一所を鑿得る

長野東山道の中にあり民右衛門を山小傳て住居をも

今井四郎兼平城其麓も古岡門の址あり里人今井と云ふ山頂小城址あり

本曾殿館其頃も小國を設く英法を防ぐと見へり

弓矢八幡宮村にあり本曾

貴船祠十月日石川兵衛光吉神田を寄進

出雲明神祠其頃も須原親を寄進八月十五日

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

阿弥陀堂大佛あり本曾

天長院真言宗あり本曾

兼平
羅城



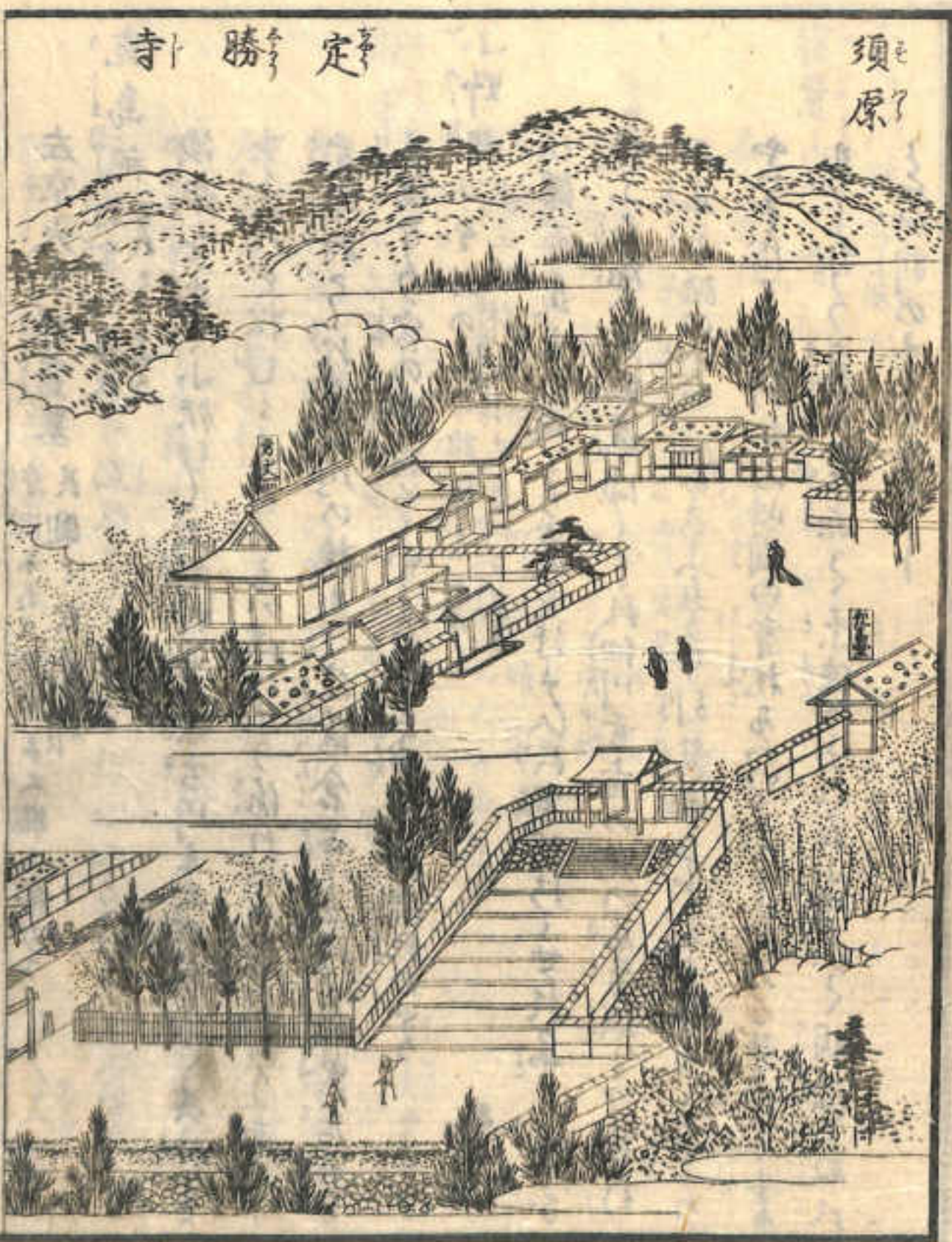
兼平

兼平



寺 勝 定

須原



奉尊釋迦佛用山香檗和尙本曾藏於十一代の御本
 十王堂小あり鐘樓はあり

鐘銘曰

山色登樓詩興濃千鈞木器響珍重
 群生試聽斜憲曉暝夢聲聲百八鐘

天文十八癸酉玉林聖贊誌

遊教位持慧章其鐘の破味を紳と大陸弘修子
 遊教位持慧章其鐘の破味を紳と大陸弘修子

寺塔云天正十年本寺義昌廣州をうけり
 義昌が鐘を御願に奉りて其鐘を定勝寺に奉りて
 其鐘の破味を紳と大陸弘修子

董思恭画一釋迦文殊普賢像三幅
 唐画墨梅一釋迦文殊普賢像三幅
 唐画出山熱山釋迦文殊普賢像三幅
 古画龍虎二幅
 左京大夫親豐之肖像九京太夫義元之肖像
 太鼓左京大夫親豐之肖像九京太夫義元之肖像
 其好尚多しと云ふ

左京大夫親豐墓 寺内本あり墓上本大徳の橋あり

鹿島祠 相宮玉置氏

瀬原を去り小沢ひく大剛村より本若川より大剛あり其流と
幸志れを松ひく本むく馬六溪川より流れありと橋あり南む
番場村よりにも溪川の橋あり津屋倉幸立町より栄店あり
交場なり宮の堂村よりわら村を過り萩原にける

小野高三丈許直下本若川より

は瀑布泉を山洞より叢をけし只市城はくせれがわく落ふ
備ふ石像の不動尊ゆきまに細川去首の巻の本若越より純行
小本若越の小聖像ゆきまに布引其面をどもゆきとくわ
やいさゆこれ程の物乃此國の奇松ありつふそりしる我もと書
ましかり真水雲飛く素練成る石小噴びく明珠と散れ
とくは所の事りる

小免川橋 本若川より長十五間南より柳本あり

寢覺山臨川寺 寢覺小あり松宗

奉尊釋迦佛 同山活山和尚

辨財天祠 方丈の表にあり尾州才四代

木曾八景
寢覺夜雨 棧道朝霞
小野瀑布 德音晚鐘
駒嶽夕照 衝川秋月
御嶽暮雪 風越晴嵐

尾州の家臣あり

寢覺牀 縁さめれ藜皮あり其間より藤川寺にり其方丈の座中

寢覺の床を藤川寺の奉裁のうさより岩間を修しててとれ

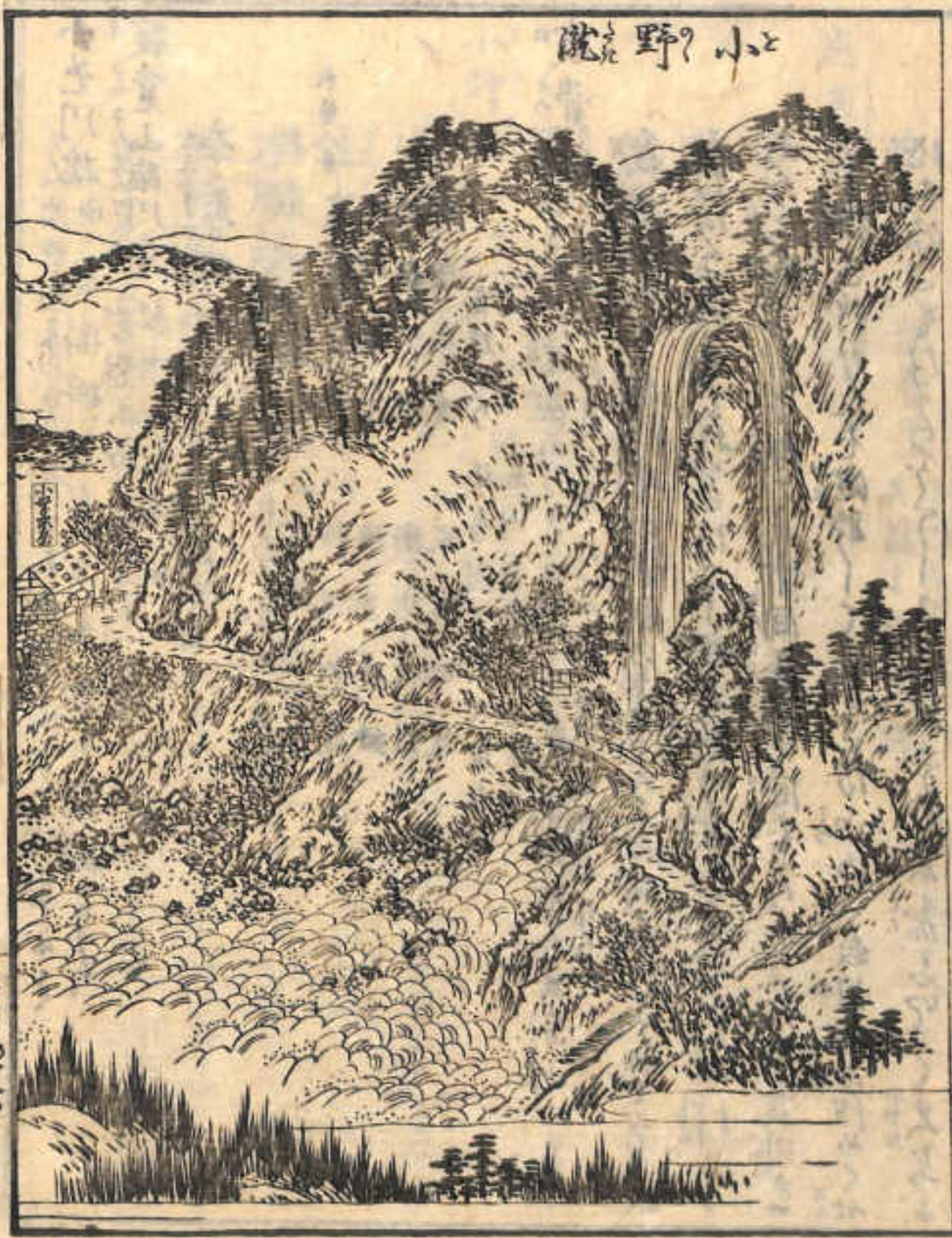
みちあり其道をれをけり福さ先の床を本若川の汀に

あり文若より横を十間長四十間をより育こ本若川を

いと狭き所なれを遊形してさふを付水のさぬ目もく修めく

地を添さもけりりさそそは福さめ本若川のいとく大なる

小野? 院



三十一

衣集
山崎
笑初
久
雲井
兄
滝
志

中務親王



巖より河小降りり高にとこ海よりわたりやうなげ洞ありしきん
 辨天をひく早き平ある所成りたる藤より其岩園の如くあるを此
 幾許せいのを志すは其うに北平あり又飛ぐ北うこの河系の中
 むて大石あり水阿くはるも本名川流る寢覚の床を大巖の西の
 方本名川よのぞきくを石岸屏風を立すれが志くし向ひも
 大巖あり其岸の回ありは川二回ありひを二回瀬ありく
 小巖を綱をわけては河成通ふを大巖の川の河長六十間
 許あり上の水も流るの岩を上麓岩中より河中に板石として一の
 石有川むらひの大岩のうよ三つ此穴あり一の大岩あり大谷とら二の
 小谷と小谷とらむらひ小屏風岩とく屏風を立するむらきある
 其下もたふ岩として巻たむらき打込岩あり又志ほく岩として鳥帽
 子もゆる岩あり其あふ河のこゆる本平岩も其うへ小龍岩有本岩
 のう小巖岩有其黒岩成多岩とら又川むらひの岩と小檜板梅松

本名川二上

など志げりもくうれちり凡は地と他所の勝てる風系にもとえく
 奇妙の風色なりいけしを樂ん幸かよありがく云葉も迷はじ
 こら高嶺あが納びされしとら小借説あり浦あが幸ハ日本紀
 雄略帝の條又と杖桑畧記小見へされしも北地小至りし更ハ人むむ
 さればこは本名流道中の名所ありて此街道成りし人まけりふ
 立寄さむも形し飛雲とら謠曲于本君れ山中より三懸登る
 山伏あやれその小違ひする幸成作まり遊を書小見へされは後
 けしとらいひあがるとら一舟勝ありし

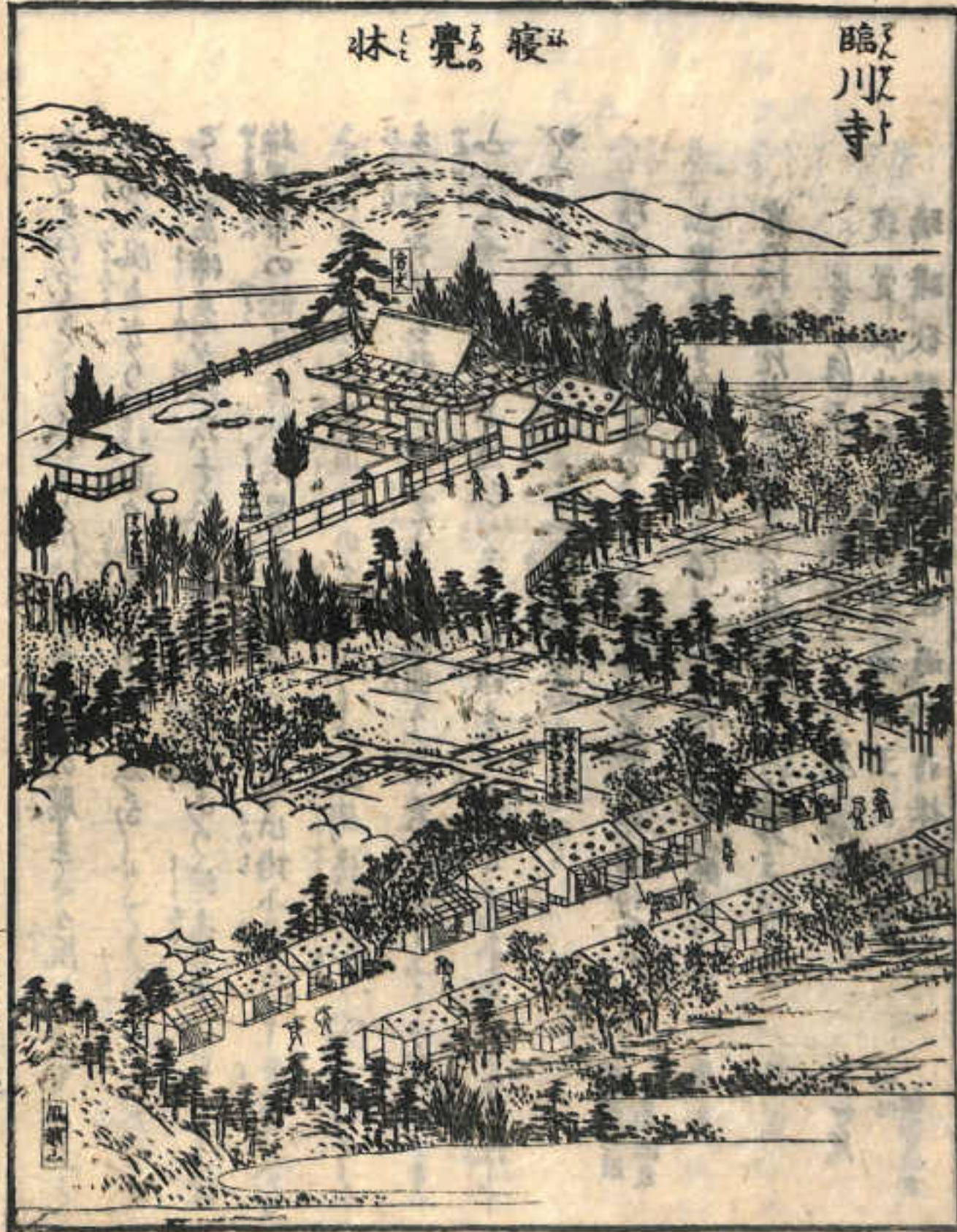
近佛勝道
 本名川
 出た
 鶴山
 吉田
 植田美方

三川傳

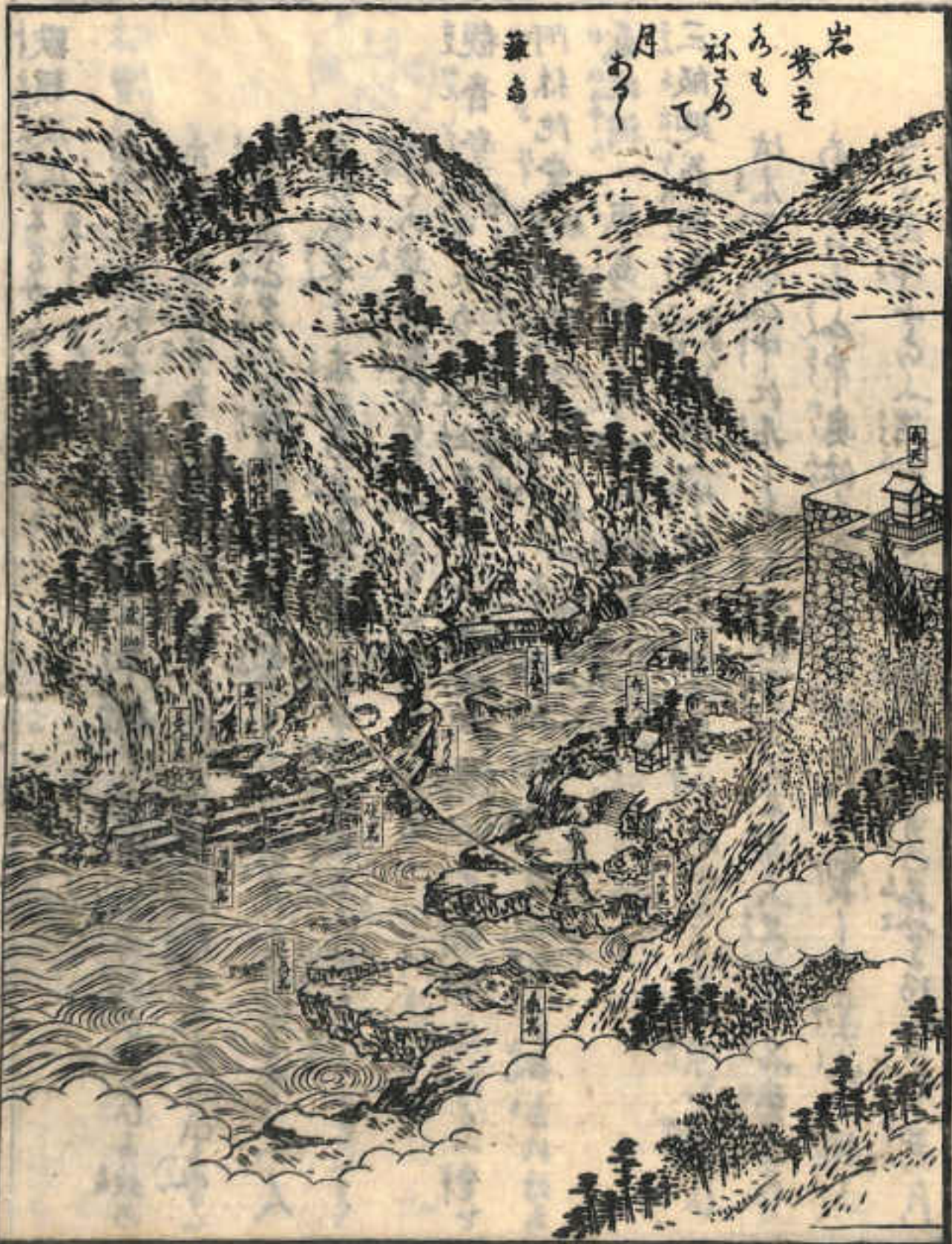
寢覺仙林巖經間碧滿鳴玉白雲開
 瑤躋欲問當時跡類過郵箱採藥還
 登り月子登座せうその床夜中し
 吉田 植田美方

臨川寺

寝の覺の林



岩
夢
あも
杯
て
月
あ
藤



獸類皮店 本若の山中は越より

何の形端以る小楚の皮糸の草猪ま皮糸龍の皮ひあひを楚の
爪百も為花牙を多く出さくこれと製しあふおれるりゆさう人
猪昨胡と夕山日持獲これと製しあふおれるりゆさう人
これ瓜求く本若の名産とん然き六雄將軍の瑞もをーとこ
多くの革店若にひるも又毒も小見也

観音堂 觀音堂にあり天正年中土民田以耕して洞窟以得る一巻を

阿弥陀堂 觀音堂の支村高野あり阿弥陀佛の画像を安んじ傳云

氣比洞 鹿島洞 神明洞 徳原氏對面

三飯廻箱用居 弘治年中此人ありて世茶と厭ひ

は本若の山中に居し不老の薬瓜人あり其頃の名醫なり

あまのる山中奥深く入る茶と産これを製し茶味と調ふ

世よ三帰せり謠曲もは人をせり良方の名譽ありと愛小若ん

和極集上下

○和極集上下 ○新撰之方 ○小兒諸門

○當流大成捷徑度印可集

○啓迪巷日用灸法 ○治肺氣通藥之部

○諸藥勢揃藥組之方并諸療

○當流依門下學主懇求 ○辨證配劑

合九卷

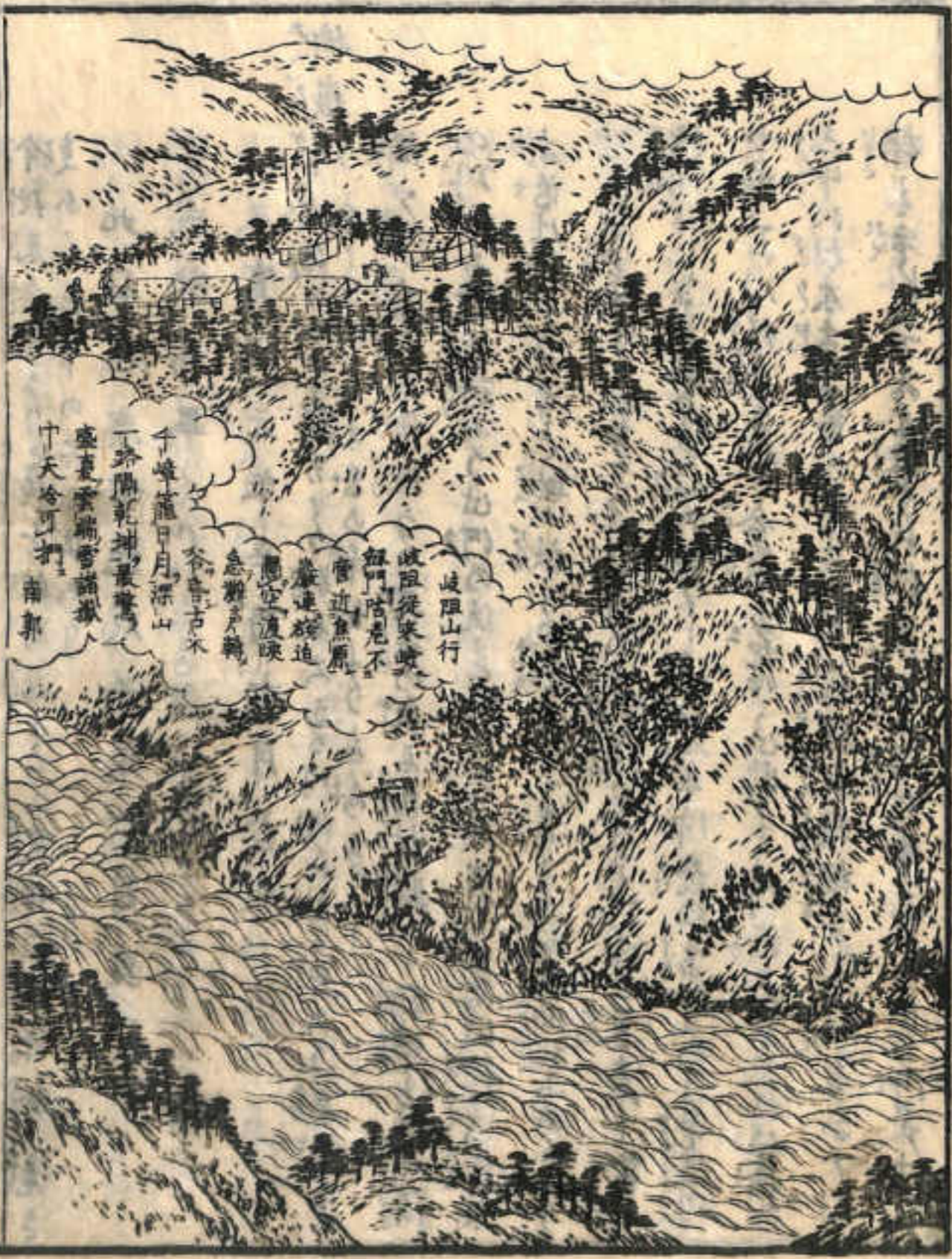
弘治第二丙辰十一月十九日夜組之

信松

福清まで二里半駅中南小五所相着して巷沢あり其峰山
間小教生して住居はは駅都會の地あり商人多し繁昌也
地より駅の小よ新築屋とあり後武三家あり萩餅を齋とて

名物とん

本曾棧齋跡 觀音堂の中にあつたやへと路險難ありて旅人又小若む
有司長五十六間換幅三間又寛保年中月報君君と
有司小倉トてた石より石段を數十丈築上棧屋と際ん



岐阻山行
 岐阻從來峻
 紐門階危不
 管近魚原
 巖連峻迫
 懸空渡映
 急難片輪
 谷音古不
 千峰籠日月深山
 一玲關乾坤景驚
 盛夏雲瑞雪滿嶽
 中天冷可打
 南郭



上松より
 福島の同小
 城方の旧跡
 ひろの上の
 山と街道
 りりて
 枝さみの瀬
 はあだつとせ
 後世今のやく石と後て
 橋も短く濠とて
 今と
 昔の
 くら

今御嶽を築き下りて此を岐計橋と云ふ長橋三間計なり

此石垣慶安元戊子年六月良辰
成就焉畢

又寛保元年辛酉十月吉辰

御嶽川

級滝の所に西の方より別川大なる川流れあり谷あり藪あり

御嶽川の本流の御嶽より其谷の奥に良材夥しく福徳より其溪の川上より十里許ありは河の流まよて材本多く出付は河上の方本流此流をけりて駒が嶽より大なりと高き山あり西北にあたりは小雲多き山あり予さ月の末に通る多しふいふと雲多し富士山同くもろく坂方より河のむらゝ道の右本流岳の多井あり本流川を清むる川形合されを合流と名づけは別より御嶽見ゆそれ岐嶺の山中に材本多き山ありよ及ん檜楡松榎多し杉もふくし樺も多しして多し厚をい故小川下へ流れ事ありゆゑ御嶽に

本流三九二

御嶽

真本持小多し又山中小も道の側小楡の本多し大樹あり葉を木の木に似たり楡をまきくみくもひく積り実ありと楡子れり土民これをとりて粉もく餅もくして飯小煮く食用とんを飢饉に多く其本は横文ありて器物小可なりと云ふも尾州君より伐ふ事と禁制もてそ持ゆへ伐りて家臣民の食物小きるゆへたて材本を伐りか人を尾州君より和泉紀伊道にの人を備へ遣り毎年春冬雪消二三月も山に入ると十月も物作れ幾千百人と云ふ事以ては妻へ山に入ふ松入すことわりなど持て毎日引もたせ以上方より本号下げは松人も山中に家畜を居候と本流楡材本に削りありて榎小ワリも長に尺許あり少し本流河へ流せはへりとも多くあふ道へは流下り河中の石小なりとてさありたかふは小煮するもの来りて藤とて松よりくると水とく石高きは通るはは流る本とも本号とて英徳の内を田のに里川と小流織とて入所よりは本流小大流と張て

信濃 福島

一本も下(海)きんせらるる... 矢よほらるる... 本名熱田へ下り熱田の中... 御嶽 本名はくはれ本とさる幸甚く... 御嶽鳥居 御嶽鳥居の御嶽鳥居... 本曾大河 本曾大河の御嶽鳥居... 御室 御室の御嶽鳥居... 宮越まで一里半... 本教至は本名若中第一の豊饒の地...

分の地さり系より級満まで六十七里福島より戸占六十八里まで

福島開隘 福島の右の方小津浦所ありは新女を
萬松山興禪寺 萬松山興禪寺の御嶽鳥居

奉尊親音 奉尊親音の御嶽鳥居
鐘樓 鐘樓の御嶽鳥居
稲荷祠 稲荷祠の御嶽鳥居
愛宕祠 愛宕祠の御嶽鳥居
義仲墓 義仲墓の御嶽鳥居

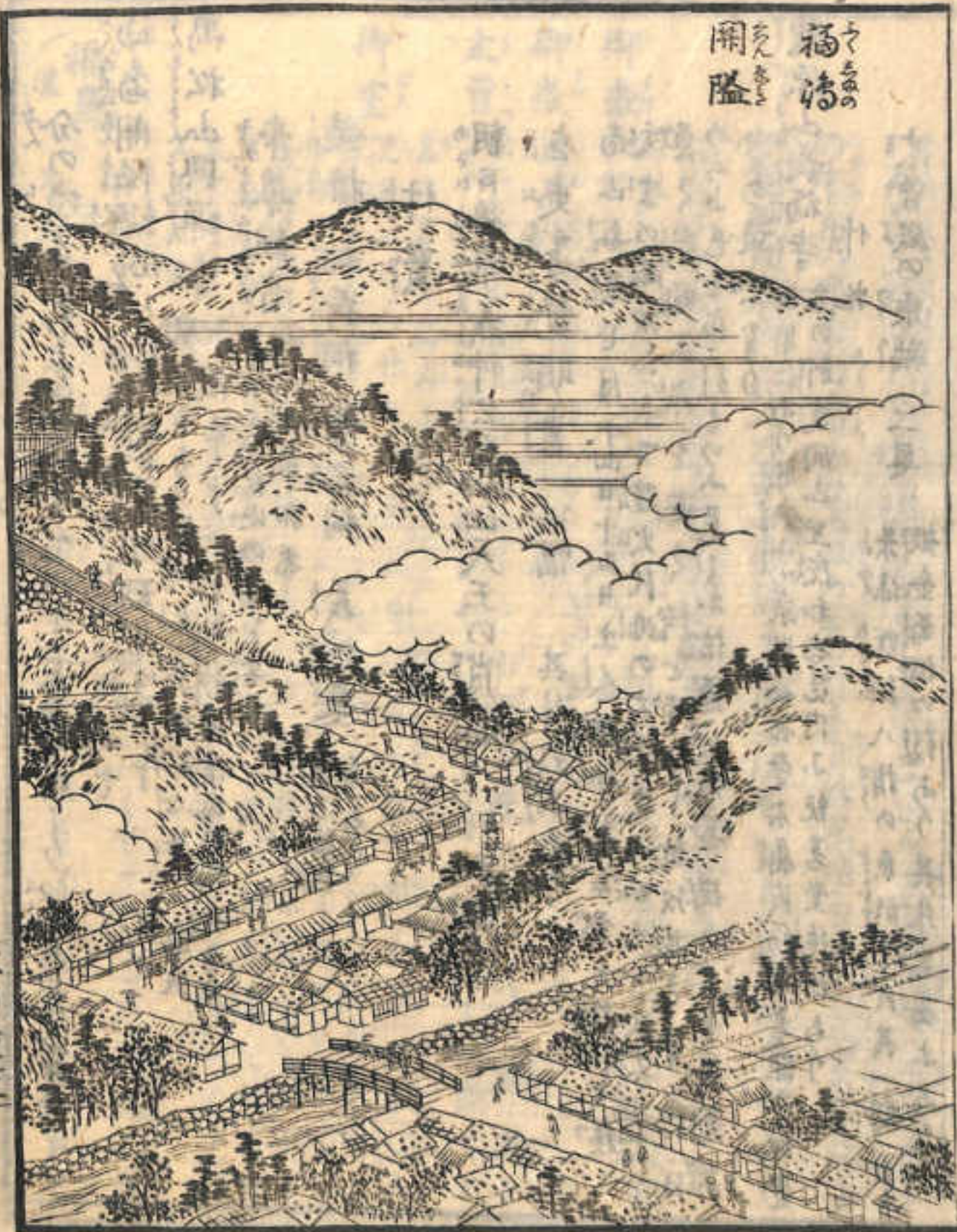
什寶

朝日將軍義仲公乃ひ四天王の肖像 三幅
右吏房覺明書 一幅 其外数品あり

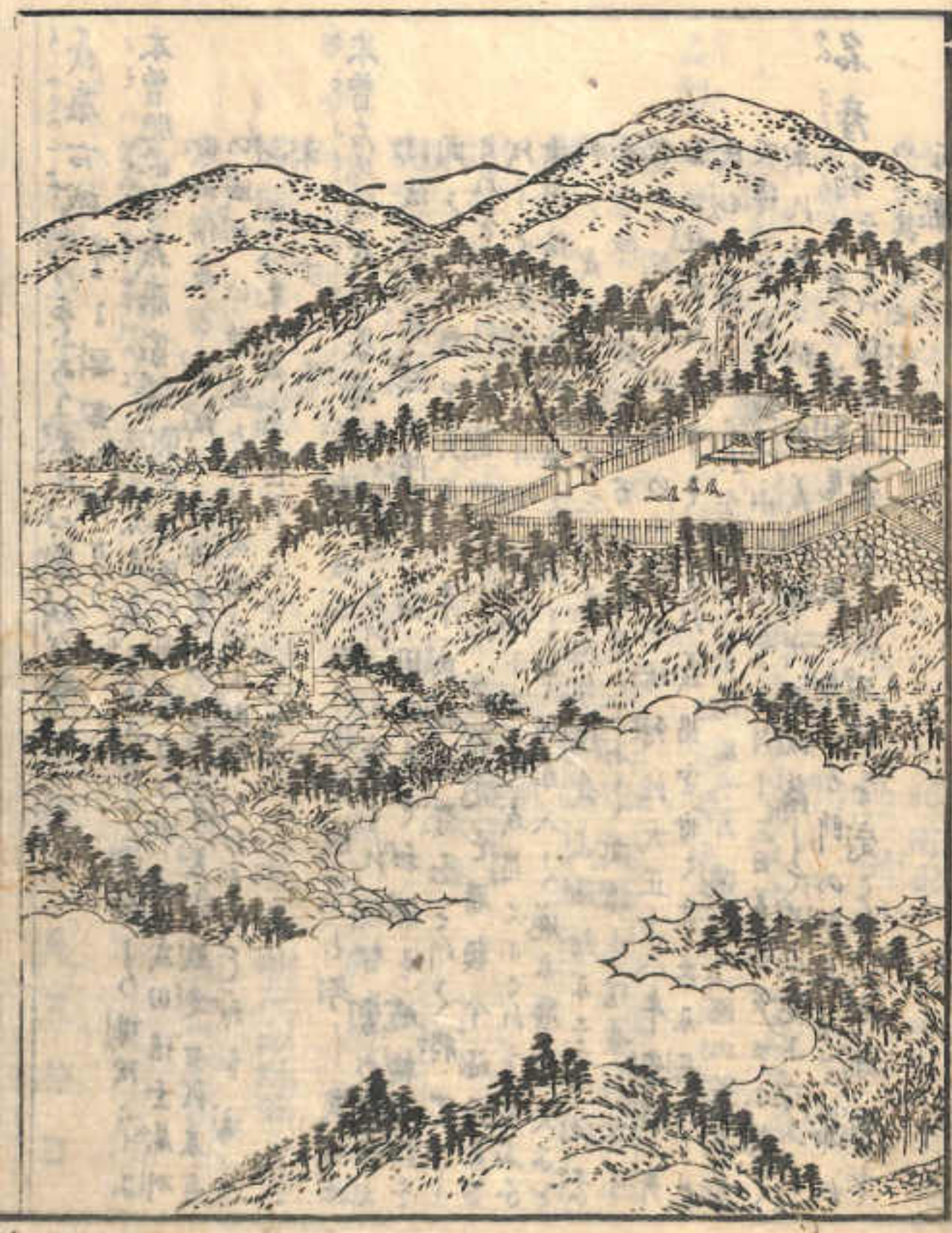
龍源山長福寺 龍源山長福寺の御嶽鳥居
龍源山長福寺の御嶽鳥居の御嶽鳥居

本曾殿の乗鞍 二具 本曾殿の乗鞍の御嶽鳥居
本曾殿の乗鞍の御嶽鳥居

福清
關隘



福清關隘



長康古城 此のふあり 戦に三軍攻び奪也

本曾肥前守義康家譜 左京大夫義隆の子なり 演宗より味成まで

武田信長と率我二十餘年及べども 弟と敗走せし本馬 永禄八年 義康没れ

本曾左馬頭義昌家譜 義康の長子なり 後伊豫守と号し 武田信

長と勝頼と隙あり 武田信長と和議を勝頼これに 聞くと大不怒 天正十年 典視信豊を討つ

武田信長父子は軍を率い 甲斐小入る 越後勝頼父子と 戦く 武田を滅し 三月十九日 信長上 諏訪小至り 法

寺小陣に 徒兵十萬 義昌を討つ 面謁を信長其功を 賞し 筑摩安曇の二郡を賜 討つ 天正十八年 豊臣秀

吉公北条氏討 平らむ 義昌を世々 本馬 居り 先 氏心を得る 願ふ 義昌を 武田 國の 戸小 率い 其子 仙三郎 義利 藤州 小流 藩して 共家 逸小 山

名産 駒 本馬の 滋 根馬を 牧を 産する 所の 駒 毎小 三 葉に 至る 其 後に 記 駒 小 樂く

下も三七日

赤魚 本馬の 味 炙り 六月 小 子 あり 鱗 尾 小 ぬり 赤し

河鹿魚 河の 岩 間 あり 長 三 尺 許 土人 云 小 味 其 鱗

岩糸魚 法 師 中 小 あり 長 七 八 寸 極 大 なる 其 鱗 の ごとし

名製 執蓄 木 小 なる 製 造 勿 論 福 清 小 多く 其 製 小 樂く 其

凍豆腐 凍 薬 諸 林 中 極 寒 の 地 なる 其 製 小 樂く 其

凍糕 山 村 氏 製 小 余 して 其 製 小 樂く 其

諸薬種 本 馬 中 小 あり 其 製 小 樂く 其

駒嶽 本 馬 駒 嶽 なる 其 駒 十 餘 枚 射 擊 遊 戯 して 其 駒 嶽 小 樂く 其

或記よ之け 山 小 神 馬 あり 三 季 物 諸 小 天 心 の 頃 織 田 右 丞 相 甲 州

と 征 伐 して 軍 攻 め ぐ 諸 將 小 白 白 之 口 是 間 信 州 駒 嶽 小 四 百 年 來

に 及 ぶ 神 馬 あり

天平十年八月信濃國獻神馬 黒身白

續日本紀云

髮尾云

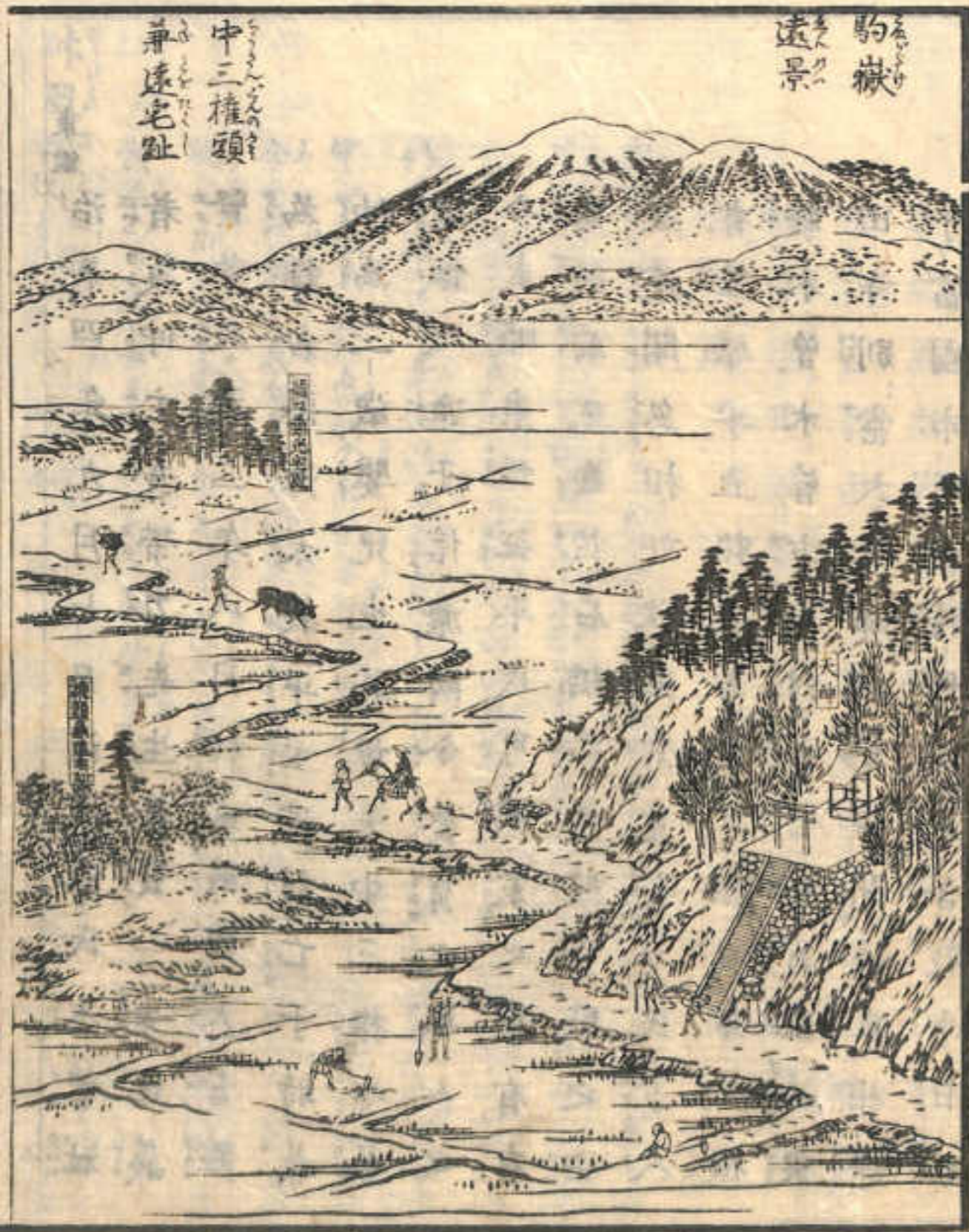
斯のゆく旧記ありは丙午諸州の軍集る駒嶽と圍んとこれを治め
 んせ思ふひつゝ此右之將の留士乃牧狩ふ做らたしや此後たまたまらふ
 所其年の六月明智光秀が萬小裁日其其事昭々といふ小の事あり
 二つの内青一小高れを大嶽と云はれり後る大なるり故本遠方より群小日也
 本曾山の中なり山の上の雪六月土用の末に消く八月又後る駒嶽の
 麓を大原と云ふ其間小川筋ありり駒嶽より流るる水なり駒嶽の
 山脈上修末宮處に在るは奥よ今村と云ふありて龍洞と云ふり寺あり
 寛永の頃飯岡城主服坂彦其孫の陣を小止宿ありて殿邑の八幡社森へ
 狩ふ知れ駒嶽と陳んて詠ん

尾も志流し頭も名く駒嶽かんのはるるに雪のくやさし

中三権守兼遠家 飯岡上田村の西あり今田圃とある其林中に

右松一本ありこれを吟んて本名義仲の元
 松松七ノ今指く

駒嶽
遠景



中三権頭
兼遠宅址

治兼四年九月七日丙辰源氏木曾冠
 者義仲主者帶刀先生義賢二男也義
 賢者久壽二年八月於武藏國大倉館
 為鎌倉惡源太義平主被討亡于時義
 仲為三歲嬰兒也乳母夫中三權守兼
 遠懷之適于信濃國令養育之成人之
 今武略稟性征平氏可興家之由有存
 念而前武衛於石橋已被始合戰之由
 達遠聞忽相加欲顯素意爰平氏方人
 有笠原平五頼直者今日相具軍士擬
 襲木曾木曾方人村山七郎義直并栗
 田寺別當大法師範覺等聞此事相逢
 于當國市原決勝負兩方合戰半日已

暮然義直箭窮頗雌伏遣飛脚於木曾
 之陣告事由仍木曾率大軍競到之處
 頼直怖其威勢逃亡為城四郎長茂赴
 越後國云々

兼遠と信州本者の人なり姓ハ中原故小本者中三と云ふは向小帯刀先
 生源氏賢其兄也馬頭義朝也不和なり武臣大者若小松と悪源義平
 此種を殺さ義賢幼兒あり駒王と云ふ後別南軍盛抱之負之信原小
 以兼遠小托以兼遠潛小書育して衣服をさせ二郎義仲と云ふ活永子
 中平家上皇以高羽の跡又小押菟高倉王義兵と起しゆ小附義仲王の
 令有以又と義兵を奉り兼遠これと輔佐と兼遠小三子あり所湯
 樋に二郎兼光今井四郎兼平落合五郎兼行みか本者殿小隨従して
 武名あり又一女あり巴と云ふ願勢力あり
 峠殿は上田村の氏小孫石橋の七郎者あり其宅あり今にあり他と
 然むと云ふ峠殿と稱して酒以祝を奉せざるものと云ふ

決あつた村民大それた難分難日將軍源義仲とてに藩府一由人

水精山 あり今に五く金満なりあり御寺も真念寺なり

烽火嶺 東名川の西麓にあり其時存候を以奉に至時と奉て去と告ぬ小若く

野婦池 野婦のたゞし流ま云ひり大原村の農民小女あり系此

研犬谷 鹿犬争ふと討つ小石壁の下に墮つ大慈悲を奉て棄て棄と進ふあり

斬蛇潭 本名川西名より相傳ふり一農夫ありは腹小件と尋く

明星巖 本名川の西麓上はあり頭注立

明星巖 本名川の西麓上はあり頭注立

本名二七七

信 宮腰

教原中て二里又宮越くも書ハ狀中東西に町半相對

正八幡宮 里人云本名義仲は神前にして元服をとり

南宮祠 一村生を神

徳音寺 本名義仲の牌を獲む同奉御日將軍本名義仲直

本名義仲及以極は兼光今井兼平画像三幅あり

本曾義仲城 里人の宮原と云ふ

系系を信和天皇七代の孫六條判官為義二男常刀先生我賢武

悪源を義平討して討平ぐむ義賢小二子あり其嫡子以仲家と

以源三位頼政妻すまふ其次に義仲と云ふ推名を駒王と名

けく父義賢害せしゆ附二兼齊孫別当安盛を討取置して佐列

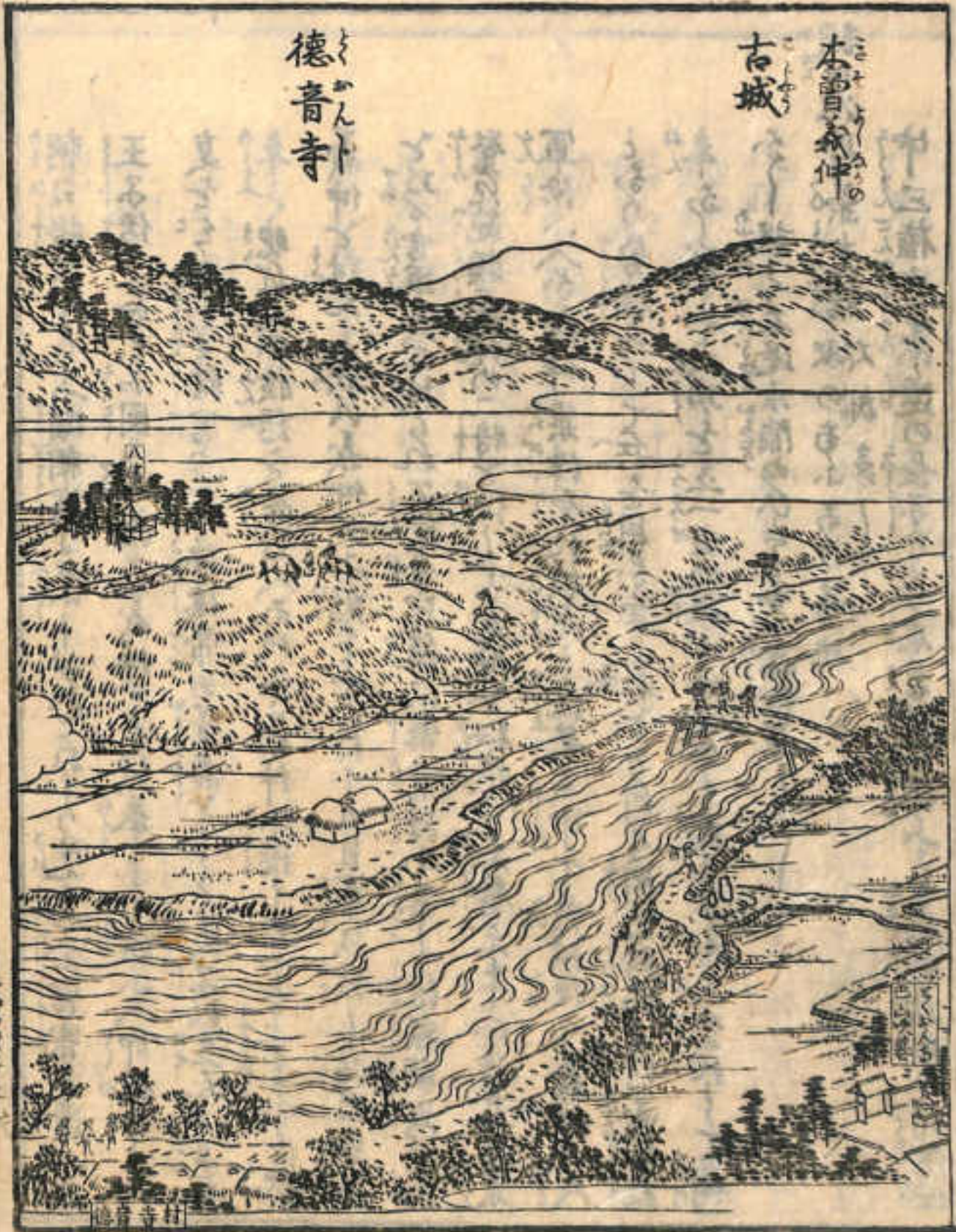
に本で中三兼遠本托以兼遠之持を養育し彼と柏原村小集
てこれ小居しむ仁安元年柏原八幡宮小遊く元服以今の文の武
八幡宮是なり名取本若二弟義仲とらふ法兼四年平家上皇と
鳥羽の難宮小塾居ふこめ時小源二位頼政の勸小より高倉
宮義兵を起し今旨を諸國の源氏小賜ふ義仲命をある兵を
奉り喜永元年九月九日熱後守長茂也横田川京に合戦し
大い小敗ふ長茂逃走ふ武威益衰ふ今井兼平樋に兼光捕親
忠根歩の親耳目股肱の臣としてて遠征四天王と称し同二年五月平
軍十萬越中破浪山小破る義仲逆小撃て大よこ是城敗ふ平軍死ふ
その七万人残兵系昨に逃淨ふ義仲北ふ以逃ふく巖岳小登り七月
廿四日上皇殿小潛幸に義仲供奉し倍入ふとれ其軍兵凡五萬
平賊帝と奉りて西海小出幸に義仲父祖の恥を雪む事小不世の
功あり八月十六日信條園瓜場小左馬頭征夷大將軍に任は上皇又命て

朝日將軍とらふ顯朝寧よ系トけれこれより先高倉宮小遭ふ其
王子信ともく小園小流落を義仲こ是以奉りて倍小入即位ありん
更をこ上皇聽容めら安徳帝の弟君とく天子に之んと是と
事く聴ふ大小憤怒を合む人ありく義仲小藩より上皇兵を起
義仲と討人と欲に義仲大小怒を十一月十九日軍以發し法住寺殿
と攻る官軍大小敗られ公卿命以殞に暴虎豺小甚し源頼朝大い小
驚に範頼義経の二將と使して義仲と征伐を元暦元年二月廿二日東
軍倍小入義仲栗津原に殺走し流業小中て首以投く義仲の人
とあり勇猛ありて兵を用ふ事寡とこりて衆小勝向ふ所必勝也
幸ありて大功を立一世の雄せしむ一危し物ととも不學にして術
か一謀く大逆小隋のひつる幸情む危し

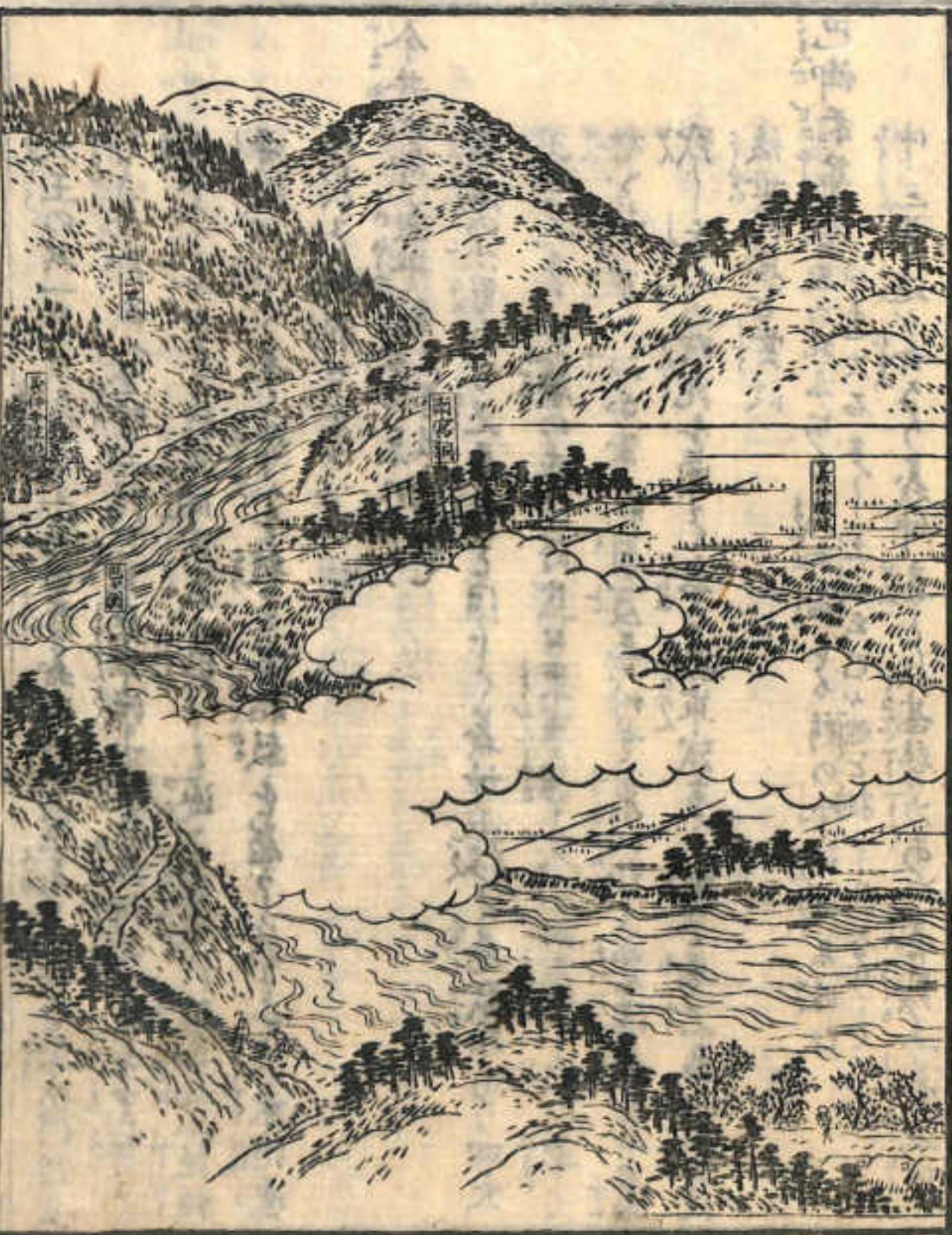
樋口次郎兼光館大榎多のふ小あり其地
中三權守兼遠の長子なり本名取小遊くく屬戰功あり所傳に

本曾系仲
古城

德音寺



本曾系仲



天王の其一方り元暦元年の春義仲の命以承く兵を率ひ河内平
赴き十郎藏人を撃つ三月廿二日東軍落小入く義仲撃つ兼光帰く
落小入くんとくこれ以聞くと小悲くと逆小東軍に降か向小法恒
寺殿以攻くと多く常人を殺す其罪赦を乞うとて六条河原
においこ斬罪せしむ

今井兼平兼平 兼平 兼平 駿の東にあり
本考殿の隣地也

兼遠の次男なり兄兼光と同日く義仲小仕く屠戮功あり四天
王の一人なり元暦の春二月廿二日東軍落小入小附兼平兵と率て
勢と拒と軍以敗ふ幸救箇度義仲を東に赴と累津原もて奮
致し主君の戦死を聞くと多ち款軍以多く敗り馬上もて自害は
後世其忠と賞は

巴御茶第蹟 巴御茶第蹟 巴御茶第蹟 駿の北にあり巴女居る所の下流也
巴女居る所の下流也

中三兼遠が女なり義仲妻とん其勢力あり善致小妻永中



小陸の戦小兵を率く將とあり元暦元年二月廿二日東軍落小入
義仲の軍敷とく勢固小勢死士率散とせんと戦兵後七騎巴女
其中にあり義仲巴女向くと同戦運命今日小入る死小勢の女子
伏撃する事恐くと後縁有り速小く以去ると巴女止む事以
得と別小又款の中へ入くと内因三郎命をとり者大力の士あり

巴女と捕んとくと馬と並に巴が髪を持佩刀と抜首以のりとん巴女
拳以拳て其肘と打首以馬を馳くと山路を徑本若小ゆる其後
右大将頼朝巴女と居て和因義盛小取也と先多力の男子と生ん
るに今以義盛と終以納くと後朝比奈三郎泰秀と摩以頼系

山吹 山吹 山吹 駿のおにあり土人云は所

平家物語云義仲小二妻あり一月巴一月山吹元暦の合戦小山吹疾
あつ系陣に止る又源平盛衰記云義仲小二妻あり一月山吹一月山吹疾

も善哉小菟破浪山本我死二説日...
盛々女... 其是... 其後...

獲曾川 これ本有太のの上流なり

住還橋 聖蹟の中にあり長サ十二間

德音寺橋 長サ十八間

義仲手洗水 信濃の末道の

石群云 往古木曾義仲公 鎮守南宮神社水

御手洗也 唱來廢年歴久矣歎之今

新造立石船者也

奈良井まで一里半 駅中南小五町許相對し

菽原 信濃 菽原 菽原の長

熊野権現祠 菽原の一村生土神といふ祠官奥田氏

極樂寺 同山茂林和尚 古島十右衛門のこまに建る

菽原宅 古島十右衛門の邸中下邸等の址今みか

五反田橋 長サ十一間本を築いて築と

巢鷹官舎 府下の鷹匠本を築く

土産 駒 本有の端村みか

名造お六橋 は店多し

押はお六橋と本有此中の名造りして

多く諸品を製造これを貸く業と

名して諸州小者一本を棟梁と

伊焚諾尊にして清子素盞鳥尊

津の爪橋を沖警小排ゆより起る

八品大明神と宗光根匠の家々

系降後小路大原細と伴特

小橋木の諸品

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 昭神と八幡匠とに神と交り其恩惠以報を乞ふ

鳥居嶺 御嶽 遠景 義仲 硯水



楠籠る伴西星名さども方く運心の體と見及是抱るくや心人
其衆則因らのく處小森勝茲四五里隔陣取くつらくは由以ら同と
心くく一騎馳らくは付退後まる者ども少く討捕頭三百餘信忠は
へ進上ら叔勝頼と本曾表を遣せて今福頼希き小巳が子の馬廻
をらり若加は於合其勢八千餘騎者居津表へ居きる二月初旬の頃
將らる六張雲のゆらく谷も暮も平等も成り二白の叶ひくは拘らるなれど
今福頼希も武者大將くて本曾は其働さる義昌が先勢も馬居
津にありあて當座の要害と據く居る乃れ今福が手遣とせる
より早く先に北者は由進してなれ義昌も安くぬ夏小とて苗本
久き湯耐中合せ出張と於合其勢七千餘騎宗良井坂と喚き叫んくらひきり
者居津をて今福と波り合ひ既不合我小乃六張雲を峯に滿く戰場にせ
まりびやふれをおのほく割腹もいらるられを地して進小をんずる勇士は
互ふ志とらく辰刻より未時まで志をたれを乃り里をわり切川持是川

南風の風をとせん途に攻致しるふあり久き湯耐父子を北山の祖とつこひ
押廻し横越小実をの難かくはさ器しる今福は横越小実を突きらる是
敗亡したれば二里が回過討みをしてなれ討捕頭の正文宗はの者は跡跡
活れ少く補有實備後と益升益原小山田左系進其外究竟の兵も六百
七十餘人なり其頭共中將信忠は本曾義昌より指申乃れ津感斜
をらくして使者小美金百兩小袖三重下し終り乃れ義昌は比類るれ
働の有津感の事ををいはれらる者妻したる信長記小ありは性と見える
義仲碑水書居津小ありは橋の邊なりは津西の下には義宗の入口より
仍もなはるより出る是より西へは通ありは是より十九里に飛越かれたら
ならばはるよりまく牛もまく性を来れとしる
雲雀のりりりふやまく人味の非
勢川まで一里半又猶井もも書以中東西七町餘お對て
巷をかり其好民家散在は宿禁昌の地りく本曾
大關中の甲たり

鎮大明神祠 鎮良井の西は小町の里港傳馬云云紀年神中矣

鍋懸嶺 鎮良井の東にあり絶頂少く東の方と峰々ありて見へし高遠の峯及び天

宗良井 鎮良井の西にあり長十間本とりのり

大寶寺 天正年中宗良井の東にあり絶頂少く東の方と峰々ありて見へし高遠の峯及び天

長泉寺 曹洞宗玉龍山と号し鎮良井の東にあり絶頂少く東の方と峰々ありて見へし高遠の峯及び天

尚中興を藤田社堂古信吉と号し其牌寺小あり信吉と上杉

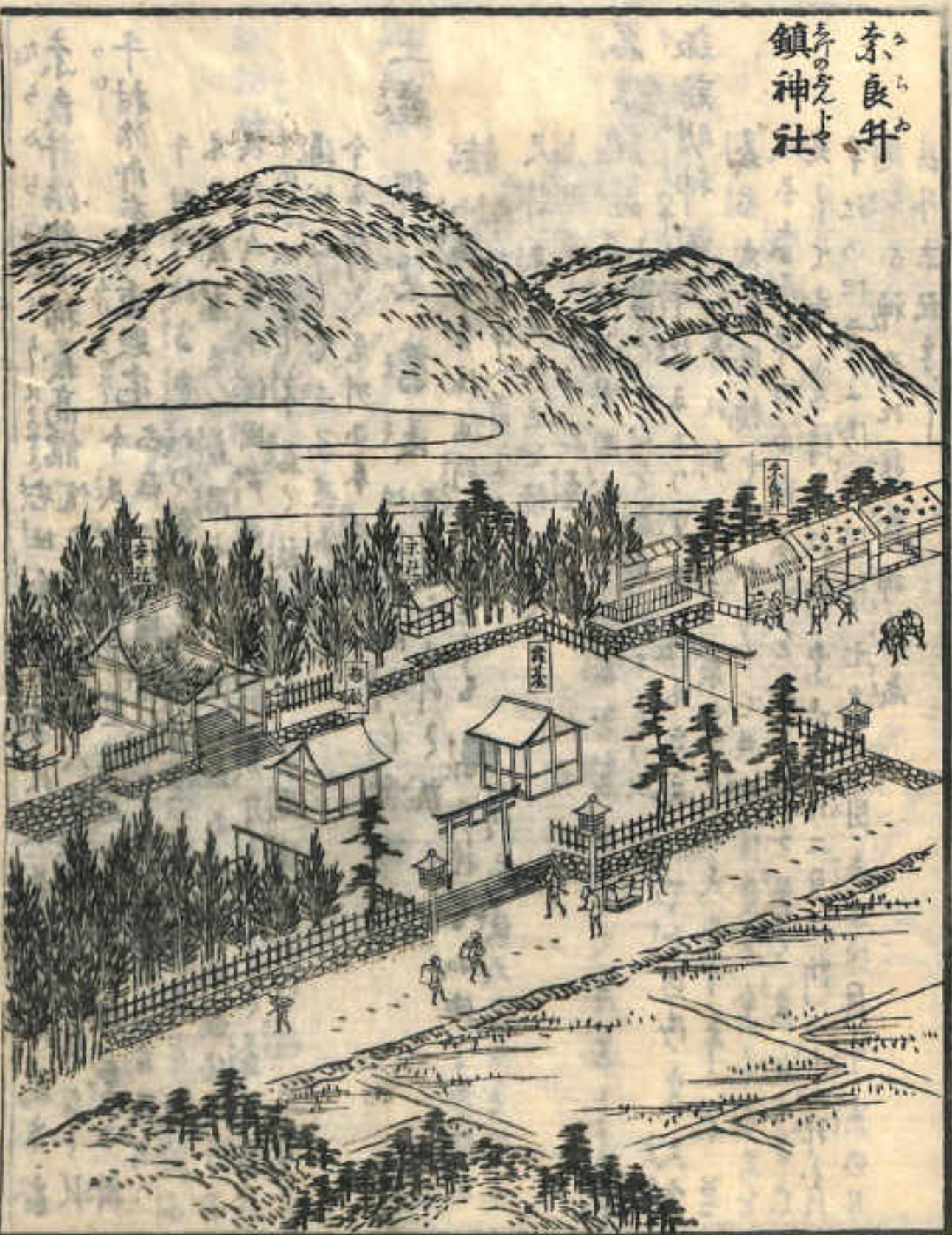
景勝の奇將小ありて断武名あり中須坂ありて仕を科し

白山権現祠 鎮良井の東にあり

鎮良井の西は小町の里港傳馬云云紀年神中矣
 鎮良井の東にあり絶頂少く東の方と峰々ありて見へし高遠の峯及び天
 鎮良井の西にあり長十間本とりのり
 天正年中宗良井の東にあり絶頂少く東の方と峰々ありて見へし高遠の峯及び天
 曹洞宗玉龍山と号し鎮良井の東にあり絶頂少く東の方と峰々ありて見へし高遠の峯及び天
 尚中興を藤田社堂古信吉と号し其牌寺小あり信吉と上杉
 景勝の奇將小ありて断武名あり中須坂ありて仕を科し
 鎮良井の東にあり

本巻三北四

鎮神社 宗良井





諏訪社
諏訪阪

糸良井治郎少輔義高館信濃の法之天正十八年率以傳記詳々
 千村治郎右衛門重照宅今民居之重照自裁不檢舊粟の樹
 千村治郎右衛門重照今民居之重照自裁不檢舊粟の樹
 本名義高乃以義高不仕へく武功あり重照領地八千石
 其後義高下総國判官不違ふ幾なりん〜義高率以
 通以殺して去ふ其子孫
 今必如何〜尾刈小奉仕を
 土産 稗 粟 蕎麥 以村水田あり〜御稗粟
 躰 小海より流小河不細きとも 鱒 河不長たり〜その三
 尺許 年毎こまと怪して
 名造諸器 小甕くを向本細工といひ 謙器を製造して彫製〜器
 諏訪明神祠 二年に創建 奉 衆果り〜天正十年 本名
 義高 武田勝頼と不和ゆ〜て典厩信豊を令〜本名と
 政を令 居 津の合 我 本 大を放ち祠を焚く 書記〜亡
 失して 幸 實 傳らば 例 天正六月廿二日 以所の生 乙未年
 卒社 乙未年 例 天正六月廿二日 以所の生 乙未年
 赴 勢 不 神 社 乙未年 例 天正六月廿二日 以所の生 乙未年
 其外末社多〜

平澤 村の器とに檢煙工室物と

幸山あて武里いりへる温泉あり故小勢川也
名はく東山道駅次は所より東武松幸領と人面と

本番首の回みの尾列産の沖領なり當駅中東面は町
仔相對して巷張かん最段阜たり其好の民病敷立に

榎澤橋 駅のいづれあり是本番仔津奈の河界なり長サ十武間
遠く橋は白木改

勢川 駒ヶ嶽より流れ其下は堰川とて其水小流して松平に
入る試波列あり海入

楠木澤 修奈郡小聖村の界より小野村ハ産神祠七奉ふ
古來列を以て村

諏訪社 一村は神とありそ
聖土神とあり

觀音寺 大田元年田村將軍劍敷其法報久くを廢
元和二年郷豪
千村氏再建を

鷲着寺 勢洞洞飛嶽山と号に
奈良井長宗寺小属を

押籠橋 尚駅の東路中に入り長サ十間本は架して梁
柱ふ一圓通なり

勢川四郎家老家 本番備後引家村の四子なりは賦本居居を
尾列氏とて子孫
尾列氏小奉仕を

千村右衛門尉俊政家 本番備後引家村の五子小即家重上列千村
其十世の孫俊政なり本番義泰に属しては邑小
長とたり其家に衣田信致の書一通小並系貞慶の状
一通本番義泰の状
一通を蔵む

萩曾 本番義泰の少あり
鹿猪羊鹿等 本番此山中より行くと獲に純中

土産 絲綿 麻 又 接骨藥 里人云ひ一人調劑と補上者ありて接骨
五月月橋 長七間

衣更着明神祠 本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

土 創嘉八月 本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

赤川 創嘉の屠邑に氏所とありし

秀綱澤 創嘉の屠邑に氏所とありし

黒川 創嘉の屠邑に氏所とありし

山神祠 本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

其法郷人河原なる小金の光あれども取上りて其霊
豊後守有公就茶大野の城主五郎長直不命にて死を討つ
人の元先不殺と云ふと云ふ秀綱と代々其孫國の國司と云ふ
其父と

駕疲嶺 本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

焼棚 本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

其 創嘉の屠邑に氏所とありし

箕作 創嘉の屠邑に氏所とありし

今 創嘉の屠邑に氏所とありし

蜂火 創嘉の屠邑に氏所とありし

小子 創嘉の屠邑に氏所とありし

其長を尺式寸燧み小ふと云ふ里民と云ふ

本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

本居山の中麓にあり其更着の御霊を祀りし

山 白の中... 又... 其...

津 津... 又... 其...

地 澤... 未川... 村中...

西野 本者... 中... あり...

御嶽 御嶽... 推... 視...

須原至徳二年... 本曾伊...

三年本者... 右馬頭... 義...

禮堂... 堂... 八...

十二月十二日... 福島...

三騎あり... 遊... 中...

山小登... 山... 祠...

御嶽... 信濃... 一...

洞... 洞... 洞...

一... 枝... と...



十二月十五日



大熊

本居路と歌の
皮をよる店
別して
塾門より

辛ふま
の同

又性木の
人小

熊腕を
活人とて

物ふ共ま

油の

まろく

とくども山間も積雪あり料本生口又三里登るとは絶頂も至
二祠あり一は王権現寺のひ一を日権現とらふ其西山の峯に三祠
あり一と俱利伽羅とらひ一と八王子とらひ一は土祖権現とらふ
其東の峰も三池あり一の池と水個とらふ一は池いあか
一の池と水満と西登小流る其小川地獄谷とらふ硫黄多く漢
川ありて王権現とらふ濁川とらふ是硫黄の氣にして其水甚と
臭きあり又山上小鳥あり乳鳥のやう毛も雌雄のてと人と
見ても驚かひ山上一草以生は葉蕨燕尾似たり小丸咲く状莖
葉はあかしく色紅紫たり名づけく駒草中の一又一草あり葉小
似く大さる葉軟にして里人採て喰ふは種を清養とらふ
氷瀧園道 王権現山あり絶頂本至は山路甚と險し地壁甚と傾水は
氷瀧園道と藍のてと名は流れて水瀧とらふ有司園道を造て山
邊のひたひた生れ来りて横たわりて山中に入る橋の長七回
橋本棚干と綴りて実本谷中第一の壯観なり馱次も非ざる
少なり橋は
少なり橋は

本卷三十四

土産十一鳥

本号若中にもかられあり雁鷹鳩の如く一軒産十一と

諸歌 鹿野霊羊が山小多し 捕射し新多くとれあり

熊皮 いまへと真ん本着の山谷にこれ取得る熊皮

山神搦子 本号係ひ山小多し 鹿野のふれあひ

色あひと 鹿野向くありひと 鹿野に人を見く鹿野に三記止つ

群狐 鹿野十月初雪の後山中の鹿舎へ入るは鹿野あり

敢て捕らぬを捕らぬと 鹿野に人を見く鹿野に三記止つ

岩戸権現祠 王権現上 岩間小祠を建清泉岩壁より 備出候く

して絶頂祠家傳云是御嶽の別宮なり 毎年六月十六日諸人

御嶽に登りて祠官導引を文龜永正天文弘治永禄等の祭文

あり又御嶽の縁起一卷あり 天正二十年三月也 未よ書は天文
の奉号三十九年也 罷所謂二十年と云曆候ありや思はれ

むく御嶽の鳥居ありふくは地と存んて今も鳥居
本号原と云

本曹殿墓 二 沢小里人其名以志之 三 只本曹殿と云ふこれハ本曹殿

矣 一 大史我元飛騨の國司を合戦し 二 於て軍敗して令以

順に即此墓なり 三 人故

推守兼遠墓 二 其由詳 三 其由詳 一 古石塔 二 巖 三 巖 一 巖

崩越古城 二 其由詳 三 其由詳 一 其由詳 二 其由詳 三 其由詳 一

三浦山 二 其由詳 三 其由詳 一 其由詳 二 其由詳 三 其由詳 一

は 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

本 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

又 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

又 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

又 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

又 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

又 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

あり 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

て 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

山 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

別 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

ま 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

勢 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

大 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

界 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

傳 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

以 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

り 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

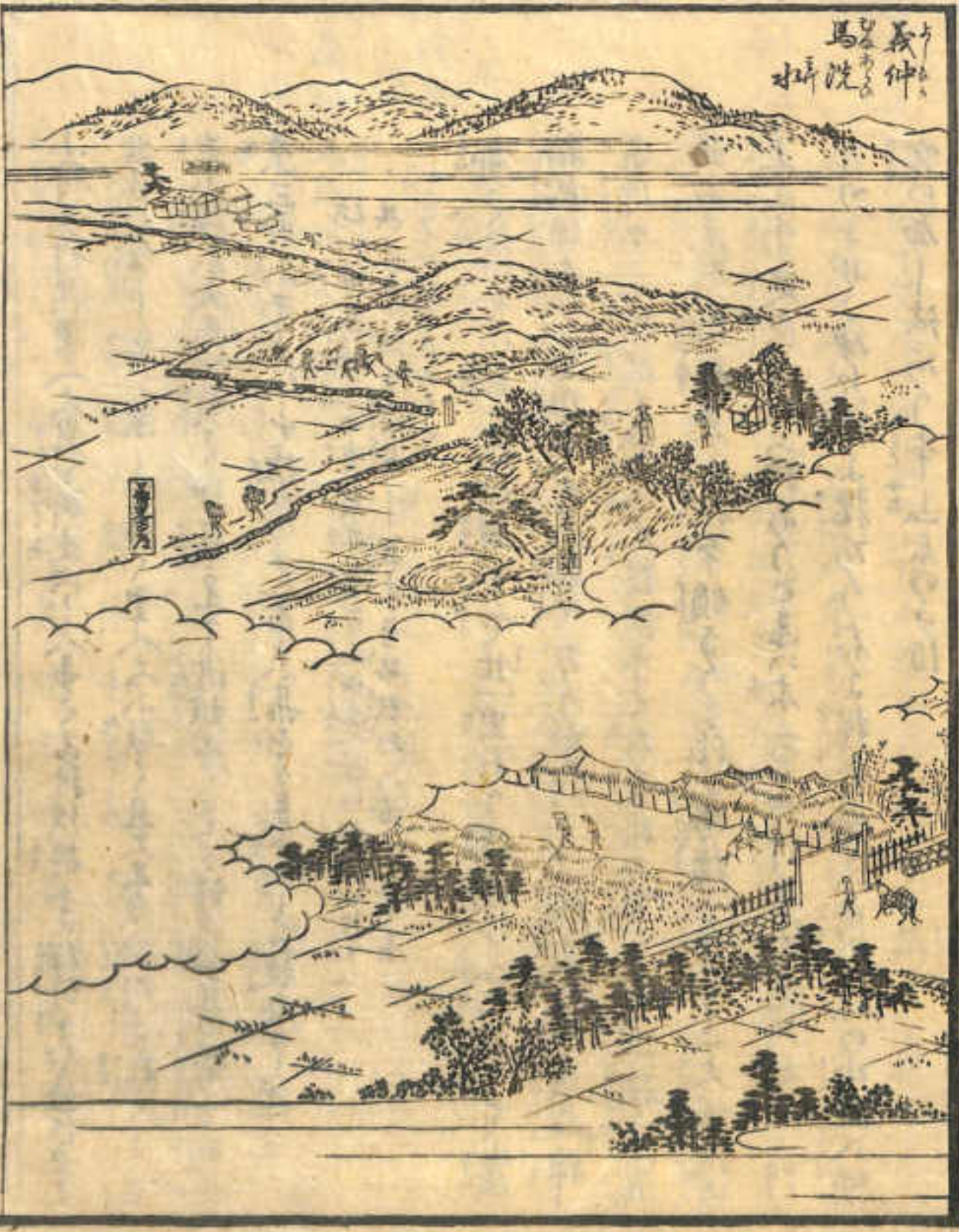
居 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

自 二 此山 三 此山 一 此山 二 此山 三 此山 一

擬木似る樹あり葉極く小なり葉を都賀と云ふ又一種あり葉細
少して背白くむすして竹の如く輝く裏白擬と云ふ俗にこれと白比る
と名づく又一種あり細葉ありて齊整なり是は虎尾擬中号く
俗に唇松ともいふ注日本屋小可なり又一種あり葉細く少して葉の
多の何り阿羅之本と号く又新羅松及び立松松まう一葉擬小似く
洞一樹の皮青く少く若く俗にこれを青ぬ右といふ其本と成て新
とすまつる乾くはは枝燃る猿所獸を退く云云後しては入
時日本と成て焼丈とて寒と遠くちと樺本何り別奉州小可流瓜
我に其皮炬と云ふは灰鶴鶴炬中号く蓋これを焼くはあま入くも
滅は故小箱を使ふよの長い炬を焼く水と懸して煙をふ可し
又白樺と名づくその何り其皮重なり高く削るとは紙の如く
炬燵小可なり又樺の皮は焼くその何り皮高く本理ありこれを
水養ると云ふ 杖小製なり又雲葉本と云ふあり即奉州小可流
本号三十四三

俗に色深せ号く紫陽小似る葉細長し竹の如く赤実灰俗に
○いふ小鳥あり巢瓜にけ籠と生は鶴鶴の如く其甚く多し又一種鳥乃
乾鷲の如く一灰意色去人呼て池心鳥と云ふ是奉州小可流山鳥なり又
御嶽壺樹の地小なる何り取雄の如く朱冠青趾羽色更白相問る其名と
稱とす但し樺と物と雲中にあり人見る事少かり
○三浦をまの宅中三浦山ありり里老相傳と云和国合戦の時其族交
小近く居る其後越小移る今に至りて越越村の百姓云ふ三浦氏也
稱はこれ所説して三年後より猶三浦の字と書は東鑑并和国義盛
我の敗して首と授くは時一族を討死に只朝比奈三郎泰秀其族の所
我とて泰秀の母と云ふ女なりは女本名兼遠の女なりて泰秀は其の孫
物に云ふ小近居るも却れ云ふ越越の百姓兼遠を祀りて地主神
と云ふ三浦をまの墓中三浦山の中あり古樹多し墳小あり是和国合戦
の族建るなり述く云ふ小馬と云ふ幸ゆし顯其子勢力ありあり是和国合

中義
馬洗
仲水



栴
梗
原

洗馬
真福寺

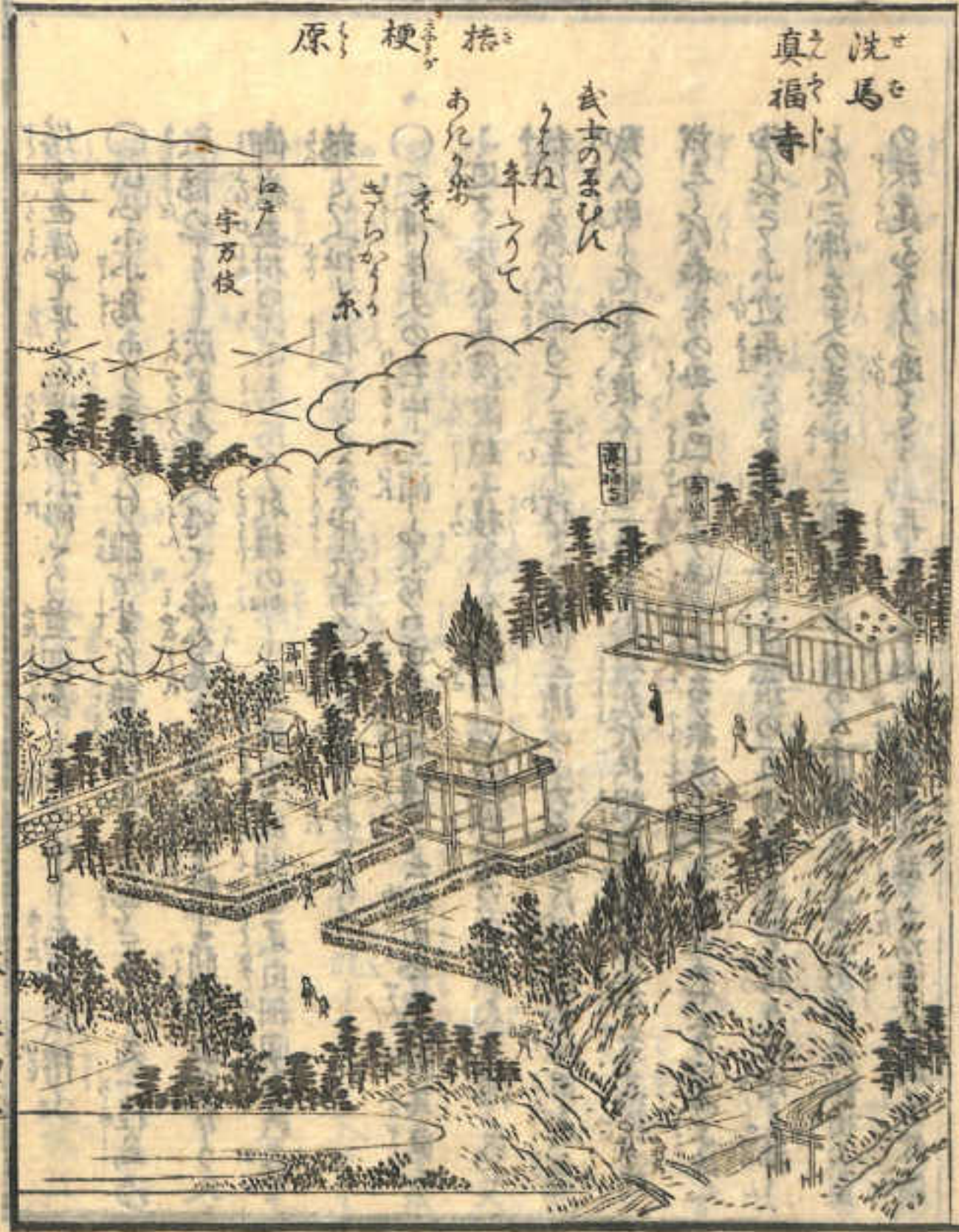
武士のまじん

幸うて

あはれ

きんぎょ

宇万枝



本巻三四十三

小郷本行其里人之岩と脚丈六十人由まらせ成辨ふは程のほどを以て
其子に命じ肩と架して得く里人大小駭く且大木派捨拍く杖し一木
者小郷も又馬と負くふと城を幸遊越きて見る所のゆゑの勢力朝比
宗三郎小あはれして推うらんまゝ小居るを更變して疑危くは

一條を鎮守の有司本者の山中巡檢のありしに
其本者志を省畧し且本者路駈跡小置しのをを
こに著るのそく

都く落合の駄よりハ驛まで廿一里あり夜獲の山路よりて崖
路棧通多く難難辛苦の路中カク熱川より柿本村中畑若神
子所平小橋沢大那本大橋沢もく本者路の界にまゝ小標本育
西と尾列所鎮東と松本領ありて往と場橋とよりまゝ大橋沢の
上と千疋原とより所ありてまゝ本者義仲多く馬成廻り所
かりとせし屋瓦は下橋ありて存し親音堂又岡の森の中に八幡
宮のありし跡あり幸山ふりて所

本山

洗馬まで二十町西の入る橋あり川左小橋より往くと本
者山より流是出る本者の幸谷ふりて

本山親音堂 本山の取の 信列巡礼所廿一表之小沢川をまゝく
橋あり 長十間 橋爪小瀧大神の鳥居ありこれを遠くをたぐりて人煙

行きて又より新樹程隔く隣たぐひ小疎し東より西りの
客らみか知事ふあり村南村ありて洗馬の駈ふりて

洗馬

塩尻まで一里三十町は所より越後高田へ三十を里
信列河中橋へ十一里松代へ十六里

義仲馬洗水 及小洗馬とより

東鑑云 治承四年十月十三日 木曾、經、若、義、仲

尋亡父義賢主之芳躰 出信濃國入上

野國仍住人等漸和順之間為俊綱

利太即也 雖煩民間不可成 恐怖思之

由加下知

善光寺別道

拈授原

武田信玄の嫡子武田を即義信甲府を

左馬の尉飯家を即義信尉其外馬場内森喜目

既小拈授原にうらむは後陣の勢をいせ

之勝を交長時と一家に同治ゆ痛負基舎

拈授原にうらむは後陣の勢をいせ

互ひ小拈授原にうらむは後陣の勢をい

て源志とて引退け長時と小拈授原にう

拈授原にうらむは後陣の勢をいせ

拈授原にうらむは後陣の勢をいせ

拈授原にうらむは後陣の勢をいせ

五三三三

信濃 堀尻

真辨小岡汗馬東為小馳遠い雄旗南小

百千の雷乃一夜中夜うれお中ゆ

定一幸ふれ六切も綴も弱らば

つは先小とせ進るるねらうの

ら武田軍記城性く見るべ

下諏訪へ三里堀尻津より西

松平丹波守度の領地六万石

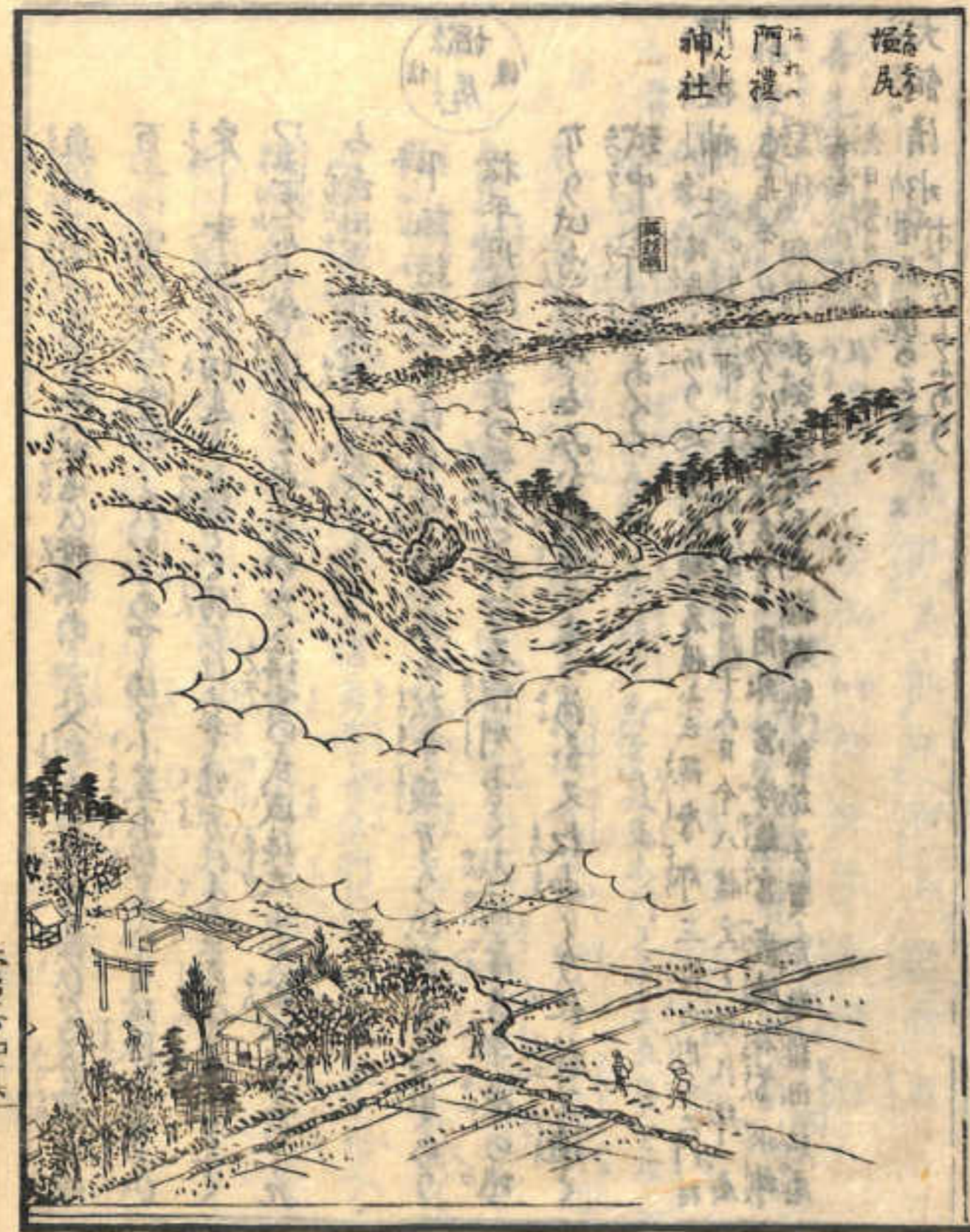
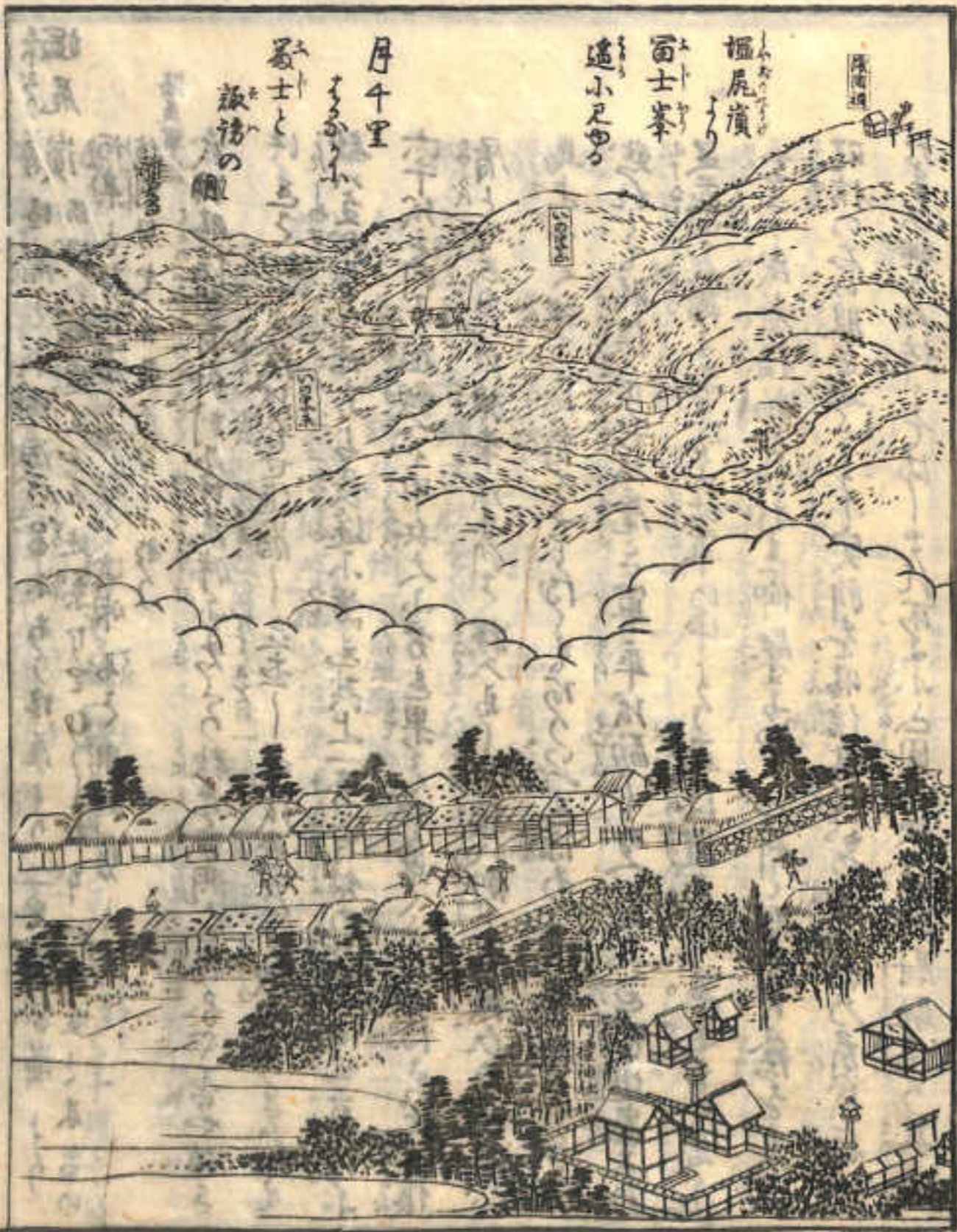
かりは香のみみか城後の

越中へ行道あり

阿禮神社

信濃 堀尻

大飼清水



木若三十四六

嶺尾 嶺尾と下河原の間にあり嶺尾より二里登る嶺より

何葉と格段ありしと云くは嶺尾ありて甲州勢と

武田晴信翌日卯刻小塩尻降下ありて味方陣を搦ふや否や拔さ

はまき切て入嶺以合せ進嶺一之壺一ありて登りてこれと

敵の壺あり味方と長途小勇は其上一勇有敵の敵兵小味方陣小

六半成之の相敵へて甲兵大小勇と果てて見くよりは先晴信

肩ともまの旗幸成りて撲入あり七願八願して敵のゆるは

馬上より組で敵首をとりてはもあつては除ありとも是より

然れども晴信自兵隊麾を軍率以勵し之に敵兵過半進嶺され

是並四度降よありて敵軍の中より是皮糧悉く麻毛する馬小

勇なる武者指物を切りて仰殿を少くはけりて馳來り嶺をりて

晴信の右の股をきりて小突所を晴信其後かの嶺の嶺乃首代極を

たすし馳がれ陣して陣しては小山田平次左衛門尉馳來り其武

本考三甲也

本考三甲也

者成馬より迷ふに對敵一押へて首をうたはるはくをくは敵軍より小

引退まて熱軍極に敗走に信州の二將のち者陣せざる内なるは

雲合の集り勢をひく小一子切乃合然して子負死人若干なり

ままは捨子を親と顧むと上り小逆退ふを追詰て討殺小首とゆ

半八百七十三級あり晴信の思慮し後小わしも遠く安んず敵と進

處し軍勢大小勇あり諸率極骨以て中大小山田平次左衛門

働と他不異とて則威状をせ下さねる

今十九日卯刻信州塚原郡嶺尾降一旗之切頭一ッ討

捕桑神妙之至作跡可抽忠信及肝要也仍如詳

天文十七戊申年七月十九日 晴信

小山田平次左衛門

晴信も河中橋小澤ありて一騎もあつては十月十日

甲府不降陣し後ひるも河中信軍記ありて見るべし

